

大阪市平野区

喜連西遺跡発掘調査報告

大阪市都市整備局による西喜連住宅建設工事にかかる
発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

大阪市平野区

喜連西遺跡発掘調査報告

大阪市都市整備局による西喜連住宅建設工事にかかる
発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所



1区全景(北から)

大阪市平野区

喜連西遺跡発掘調査報告

大阪市都市整備局による西喜連住宅建設工事にかかる
発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

序 文

本書は喜連西遺跡における発掘調査の第1冊目となる報告書である。

今回の大阪市営住宅の建替えに伴う調査は、今後も予想される喜連西遺跡の本格的な発掘調査の契機になったほか、遺跡の性格の解明に向けての基礎的な資料を得ることができた。さらに遺跡が調査地の周辺に拡がることを明らかにしえた意義は大きい。

本書では弥生時代中期後葉および同終末の成果についてはもとより、さらに時代が遡る縄文時代前期や後期旧石器時代の成果をも加えることができた。これらによって本遺跡は南に位置する瓜破北遺跡と関係が深い遺跡であることがわかったほか、全長22mの大型の墳丘墓の確認は、当地域の弥生時代終末の墓域や当時の墓葬の在り方についても新たな知見を加えたといえよう。

今回の発掘調査と資料整理、報告書の刊行に当たっては、大阪市都市整備局をはじめとする関係各位、地元の皆様にご協力いただいた。ここに深く感謝の意を表するとともに、今後より一層のご支援、ご協力をお願い申し上げたい。

2012年3月

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所長 長山 雅一

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所が2010(平成22)年度に平野区喜連西四丁目で実施した大阪市営西喜連住宅建設工事に伴う発掘調査(KR10-1次、KRは喜連西遺跡および喜連東遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所次長南秀雄ならびに長原調査事務所長(当時)佐藤隆の指揮のもとで、嘱託調査員成海佳子が担当した。調査の期間・面積は第I章に示す。
- 一、本書の執筆および編集は、同研究所東淀川調査事務所長佐藤隆の指揮のもと総括研究員田中清美が行った。本書の用字用語や体裁などの調整は、佐藤・事業企画課長代理清水和明・学芸員小倉徹也の報告書校正委員が行った。
- 一、遺構写真は主として調査担当者が撮影したが、一部を寿福写房 寿福滋氏に委託した。遺物写真の撮影は、写房楠華堂 内田真紀子氏に委託した。
- 一、空中写真測量および基準点測量は、株式会社パスコに委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当研究所が保管している。

凡 例

1. 本書で用いた層序学・堆積学などの用語の中で、遺跡の地層に係る特殊な用語については[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。また、本書の地層名は、発掘調査における層序番号を用いており、「瓜破北遺跡の基本層序」との対比には[大阪市文化財協会2006]を参考にした。
2. 本書における遺構名の表記には、掘立柱建物(SB)、柵(SA)、溝(SD)、土塙(SK)、柱穴・小穴(SP)、その他遺構(SX)を冠している。遺構番号は調査時に付したものを踏襲したが、69番以降については新たに付した。また、SB61の各柱穴についてはほかの遺構番号との重複をさけるため、SP 1～9とした。
3. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP+○m」と省略した。また、座標値は「測地成果2000」に基づく。図中の方位は図1・3が真北を、それ以外は座標北を基準とした。
4. 本書で用いた地層の土色および遺物の色調は、『新版 標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄2006]に拠った。
5. 本書では庄内式土器を弥生時代終末に位置付け、庄内～布留期の土器の分類・編年については[田中清美2011a・2011b]に拠った。暦年代は光谷拓実氏による年輪年代に拠っている[光谷拓実・大河内隆之2006]。また、平安時代の土器の記述方法、分類、年代観などについては[佐藤隆2008]を参考にした。本文中では煩雑を避けるため、これらの引用文献をその都度提示することを割愛した。
6. 引用文献は巻末に示した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査地の位置と既往の調査	1
第2節 発掘調査の経過と報告書の作成	5
第Ⅱ章 調査の結果	7
第1節 層序	7
第2節 弥生時代の遺構と遺物	11
第3節 室町時代の遺構と遺物	25
第4節 江戸時代の遺構と遺物	32
第5節 各層出土の遺物	34
第Ⅲ章 調査のまとめ	37
引用・参考文献	43

索引

英文目次

図 版 目 次

- | | | | |
|---|--------------------------|----|------------------|
| 1 | 地層断面(一) | 8 | 室町時代の遺構(二) |
| | 上：1区 東壁地層断面5～6区(西から) | | 上：鋤溝群全景(北東から) |
| | 下：1区 東壁地層断面6～7区(西から) | | 下：鋤溝群全景(北東から) |
| 2 | 地層断面(二) | 9 | 室町時代の遺構(三) |
| | 上：1区 東壁地層断面4A区南部(西から) | 10 | 室町時代の遺構(四) |
| | 中：1区 東壁地層断面4A区中央部(西から) | | 上：SP62検出状況(南から) |
| | 下：1区 東壁地層断面4A区以北(南西から) | | 中：SP63(南から) |
| 3 | 弥生時代終末の遺構(一) | | 下：SP64(南から) |
| | 上：SK66検出状況(北から) | 11 | 室町時代の遺構(五) |
| | 下：SK66南北セクション東壁地層断面(西から) | | 上：SK35断面(南から) |
| 4 | 弥生時代終末の遺構(二) | | 中：SD03・04断面(北から) |
| | 上：SP37検出状況(南から) | | 下：SD05断面(北から) |
| | 中：SP37土器埋納状況(南から) | 12 | 遺構出土遺物(一) |
| | 下：SP37断面(南から) | 13 | 遺構出土遺物(二) |
| 5 | 弥生時代終末の遺構(三) | 14 | 遺構出土遺物(三) |
| | 上：SX75全景(南東から) | 15 | 遺構出土遺物(四) |
| | 下：SX75全景(南東から) | 16 | 遺構出土遺物(五) |
| 6 | 弥生時代終末の遺構(四) | 17 | 遺構および各層出土遺物(一) |
| | 上：SX75南周溝東部遺物出土状況(南東から) | 18 | 遺構および各層出土遺物(二) |
| | 下：SX75拡張区西周溝全景(南から) | | |
| 7 | 室町時代の遺構(一) | | |
| | 上：1区 第5層上面遺構検出状況(北から) | | |
| | 下：1区 第5層上面遺構検出状況(北から) | | |

挿 図 目 次

図1	喜連西遺跡の位置	1	図17	SK73出土遺物実測図	19
図2	喜連西遺跡および瓜破北遺跡のおもな既往の調査	2	図18	SP37平面・断面図および出土遺物実測図	20
図3	遺跡の位置とその周辺の地形分類	3	図19	SX75・76平面・断面図	21
図4	喜連西遺跡の位置とその周辺の遺跡	3	図20	SX75南周溝出土遺物実測図	22
図5	調査区配置図	5	図21	SX75西周溝出土遺物実測図	23
図6	1区北壁および東壁地層断面図	8	図22	SX75北周溝出土遺物実測図	24
図7	2区南壁および西壁地層断面図	9	図23	第4層下面および第5層上面遺構配置図(1)	26
図8	第6層上面遺構配置図(1)	12	図24	第4層下面および第5層上面遺構配置図(2)	27
図9	第6層上面遺構配置図(2)	13	図25	SB61・SA70平面・断面図	28
図10	SK66平面・断面図	14	図26	SD11・鋤溝群平面・断面図	29
図11	SK66出土遺物実測図(1)	15	図27	SK35・SD58・鋤溝群平面・断面図	30
図12	SK66出土遺物実測図(2)	16	図28	SD58出土遺物実測図	31
図13	SK66出土遺物実測図(3)	17	図29	第2層上面遺構配置図	32
図14	第6層上面遺構平面・断面図	18	図30	各層出土遺物実測図(1)	34
図15	SX59および周辺出土遺物実測図	19	図31	各層出土遺物実測図(2)	35
図16	SX72出土遺物実測図	19			

表 目 次

表1	喜連西遺跡と瓜破北遺跡のこれまでのおもな調査	4	表4	遺構観察表	39
表2	発掘調査の期間など	6	表5	遺物観察表(1)	40
表3	層序表	10	表6	遺物観察表(2)	41
			表7	遺物観察表(3)	42

写 真 目 次

写真1	重機掘削状況	6	写真2	人力掘削状況	6
-----	--------	---	-----	--------	---

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査地の位置と既往の調査

喜連西遺跡は大阪市域の東南部、平野区喜連西四丁目一帯に位置する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であるが、遺跡の範囲や実態については明らかでない部分が多い(図1・2)。本調査に先駆けて住宅建設予定地内の4箇所を実施された大阪市教育委員会文化財保護担当による試掘調査では、旧市営住宅の建設時の整地層下に室町～江戸時代の遺物を含む地層、層相から弥生～平安時代の地層とみられる暗灰褐色シルト質粘土層、旧石器を含む可能性が指摘された黄色ないし灰色の粘土～砂質粘土層が確認されている。

調査地の東南約300mには東西・南北とも約400mの範囲に広がる旧石器～江戸時代の複合遺跡である瓜破北遺跡[大阪市文化財協会2006・2009]が位置しているほか、西南約200m付近には、城南学園のキャンパス内の調査で弥生時代終末の土器棺墓[古市晃・杉本厚典1997]が、この近くのYT97-1次調査地でも古墳時代中期の竪穴建物をはじめ、鎌倉～江戸時代の遺構や遺物が検出された矢田2丁目所在遺跡が位置している[松本百合子1999]。

一方、調査地の南側には古代の摂津・河内の直線国境を兼ねる道路として八尾市域から住吉津に至る磯鹺津路(敷津長吉線/長居公園道路)が東西に走っており、調査地はこれに南面する位置にある。

また、調査地の東方の喜連東遺跡では縄文海進期に生駒

山麓の西側に広がっていた河内湾の南岸とみられる海蝕崖をはじめ、南の河内台地から北に開く「馬池谷」の延長部が確認され、KR94-7次調査では谷に堆積した4mに及ぶ地層を確認し、その中の縄文時代前期末～中期の地層はこの一帯に海水が浸入していたことを示す汽水成層であった[大阪市文化財協会2009b]。「馬池谷」内ではKR82-2次調査で弥生時代中期中葉の土器や石器が出土したほか、谷を望む段丘上からKR99-2・00-2次調査で弥生時代後期前葉の方形周溝墓、KR86-2・4次調査で弥生時代終末の突出部のある墳丘墓や方形周溝墓、KR99-1・00-1次調査ほかで古墳時代中期の方墳群、KR89-2次調査で奈良～平安時代の掘立柱建物群や井戸、KR86-3次調査で室町時代の集落や廟堂など多岐に渡る遺構や遺物が検出されている[大阪市文化財

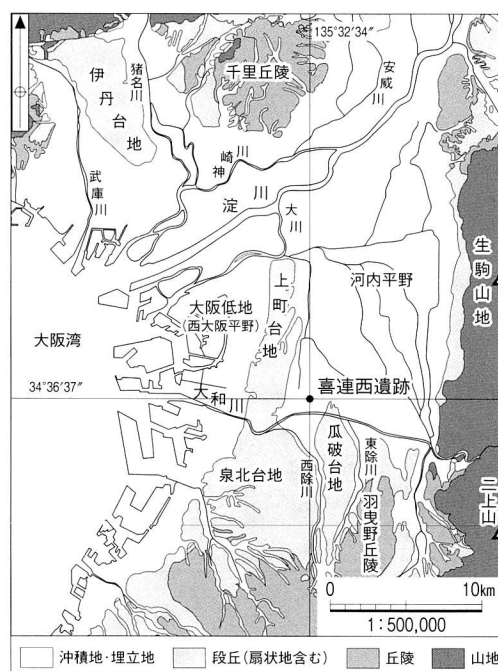


図1 喜連西遺跡の位置

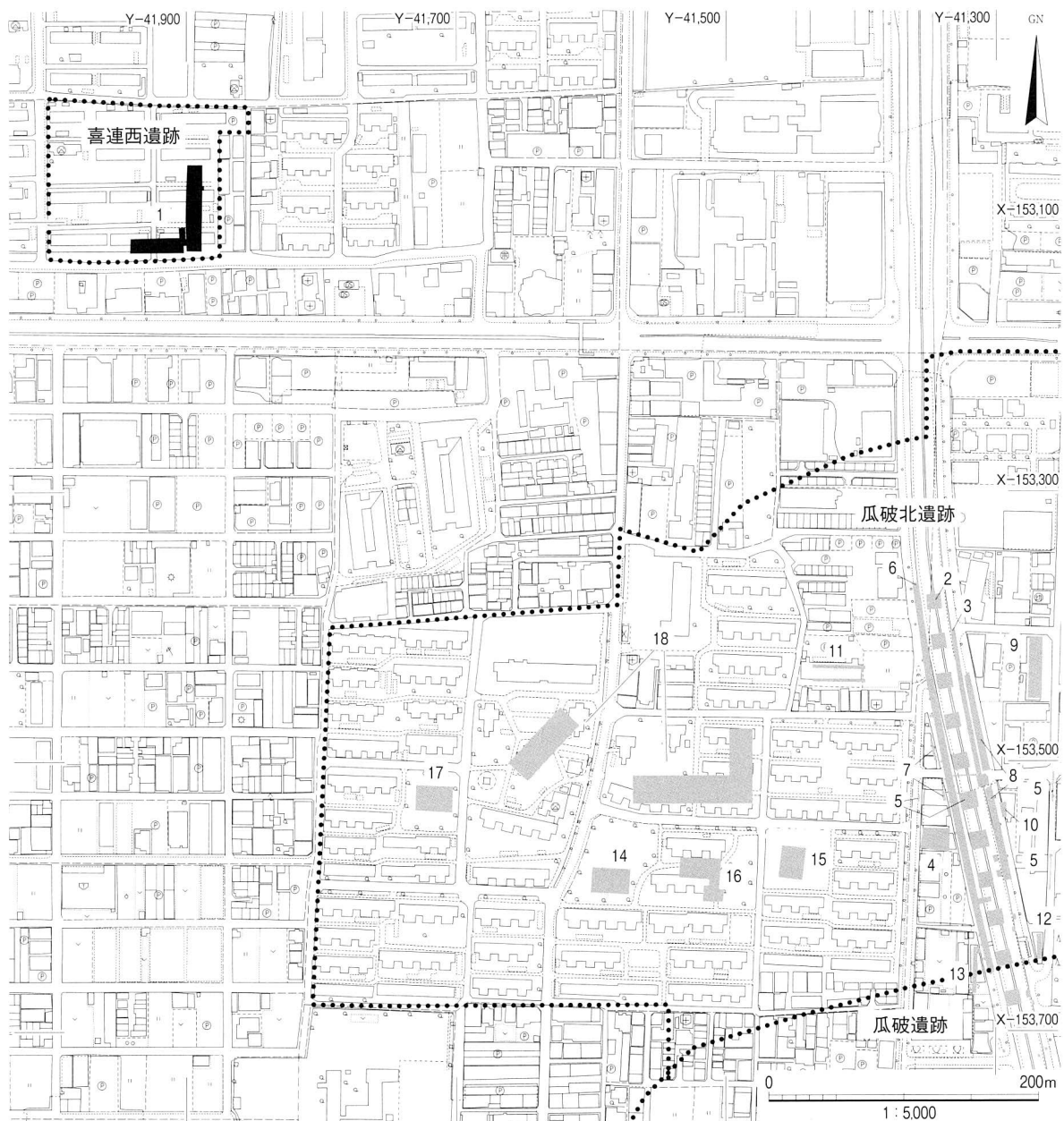


図2 喜連西遺跡および瓜破北遺跡のおもな既往の調査

協会1999・2009b]。

一方、喜連西遺跡から喜連東遺跡にかけての地域は既述した磯歯津路やいわゆる条里制の形跡を示す田畑が近年まで遺存していた場所であり、1942年(昭和17)の航空写真や1885年(明治18)の陸軍測地部による当地域の地形図には、喜連村史の会代表の白川俊義氏も指摘されているように条里制の地割や「伎人堤」と伝わる堤防跡の一部と重複する磯歯津路、一部が「行者堤」と推定されている古市街道、現在は跡かたもなくすっかり埋め立てられてしまった西池、西喜連環濠集落の中央部を南北に通る中高野街道などが見て取れる[白川俊義2010]。したがって、本調査地においても後述するように旧市営住宅建設時の整地層下には、調査地域が江戸時代以来長らく田園地帯であったことを示す作土層をはじめ条里制地割の方向と一致する溝や畦畔が見られた。

ところで、喜連西遺跡の南側を東西方向に走る長居公園通りは、先述したように摂津と河内の直

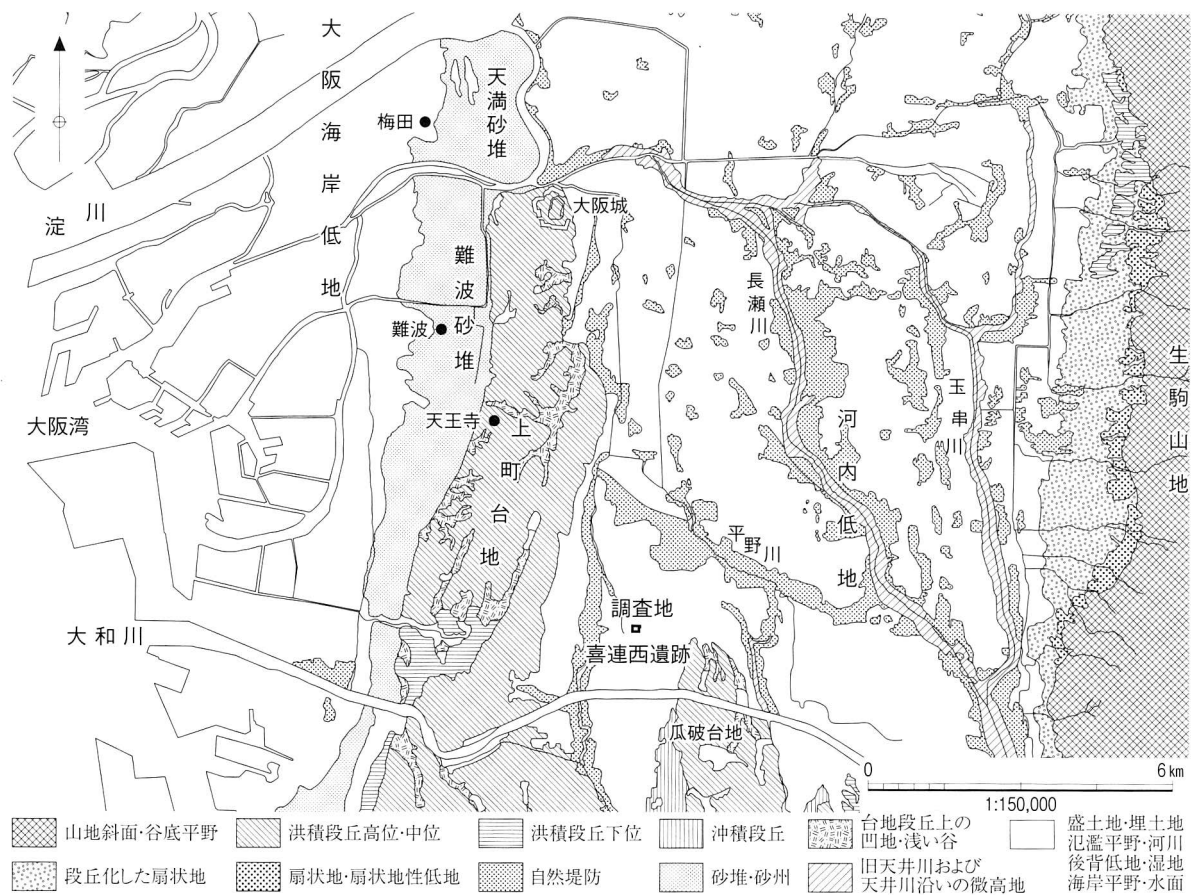


図3 遺跡の位置とその周辺の地形分類(〔建設省国土地理院1965〕に一部加筆)

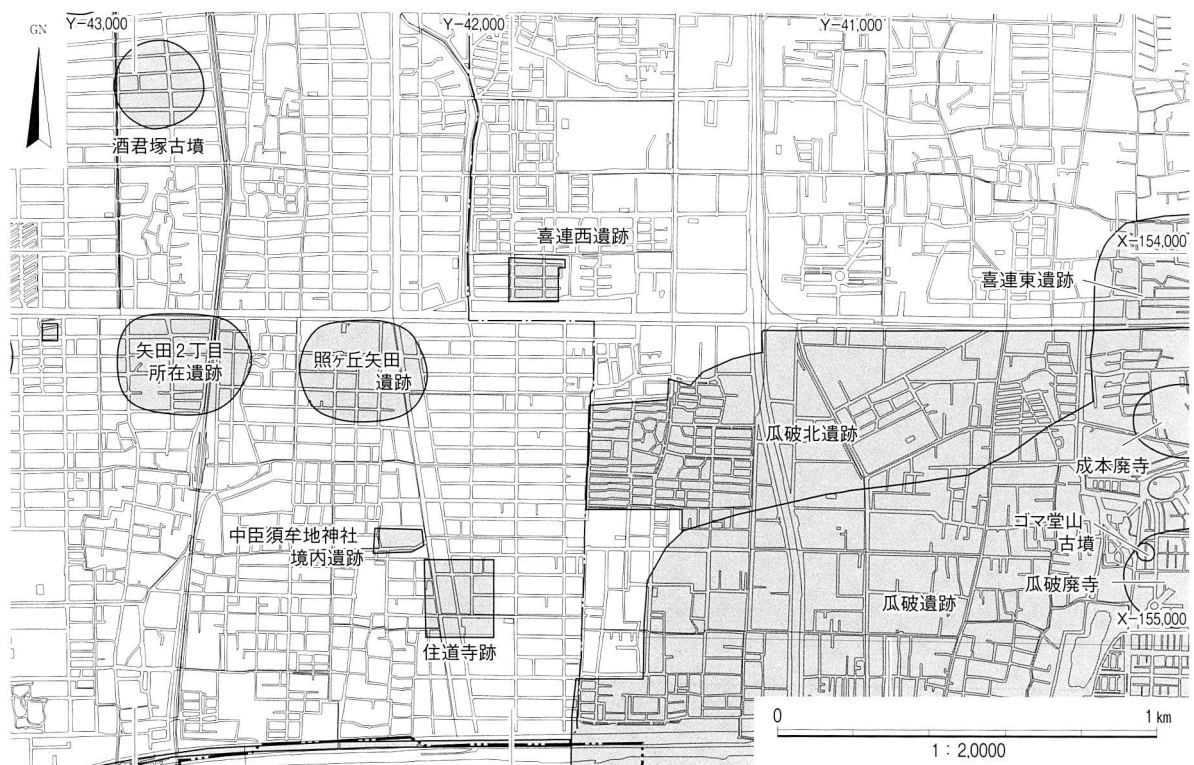


図4 喜連西遺跡の位置とその周辺の遺跡

表1 喜連西遺跡と瓜破北遺跡のこれまでのおもな調査

番号	名称および調査名	調査年度	おもな遺構・遺物	参考文献
1	KR10-1	2010		本書
2	UR-4	1976	弥生後期～古墳前期集落、大溝	大阪市文化財協会1980
3	UR-5	1976	弥生後期～古墳前期集落、大溝	大阪市文化財協会1981
4	辻本商店跡地	1977	弥生後期大溝	大阪市文化財協会1980
5	UR-7	1978	弥生後期大溝、小穴群	大阪市文化財協会1980
6	UR-8	1978	古墳前期方形周溝墓、土壙墓、大溝、中国鏡	大阪市文化財協会1980
7	UR80-2	1980	古墳時代前期方形周溝墓	大阪市文化財協会2000
8	UR80-3	1980	弥生時代後期・古墳時代前期集落、大溝、中国鏡	大阪市文化財協会2000
9	UR81-5	1981	弥生時代の沼状堆積	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983
10	UR88-43	1988	弥生時代後期～古墳前期集落、吉備型甕	大阪市文化財協会2000
11	UR89-1	1989	弥生時代後期～庄内期集落	大阪市文化財協会2000
12	UR90-13	1990	自然流路、深掘りによって段丘構成層を確認	大阪市文化財協会2000
13	UR91-3	1991	弥生中期石器製作址	大阪市文化財協会2000
14	UR04-1	2004	旧石器～縄文時代石器遺物、縄文石器製作址	大阪市文化財協会2006
15	UR04-2	2004	弥生後期後半～古墳前期集落、庄内期方形周溝墓	大阪市文化財協会2006
16	UR04-3	2004	縄文流路・土器・石器、弥生後期後半集落	大阪市文化財協会2006
17	UR06-1	2006	縄文土器・旧石器～縄文石器遺物	大阪市文化財協会2009a
18	UR07-3	2007	旧石器製作址、縄文前期流路、弥生後期末集落	大阪市文化財協会2009a

線国境を兼ねた磯齒津路とみられており、『日本書紀』雄略天皇14年条には「この月に呉の客のため道を造って、磯齒津路に通わせた。これを呉坂と名づけた」とある。磯齒津路は住吉の津より東に進み、現在の住吉区長居西2丁目から喜連西遺跡の南を通して八尾に至る古代の幹線道路であり、今後、喜連西遺跡でも磯齒津路に関係する遺構や遺物が検出される可能性がある。

第2節 発掘調査の経過と報告書の作成

調査区は敷地内東南部の住棟建設予定地内に南北棟部分を1区、東西棟部分を2区として設定した。調査面積は1区が630㎡、2区は390㎡である。なお、1・2区との間をSX75の規模や性格を究明するため、約40㎡拡張したほか、1区の北部についても東壁際で遺構が確認されたため、約3㎡拡張した。したがって、最終的な調査面積は1,063㎡である。

調査に先駆けて平成22年6月14日からパネルゲートの設置工事、進入路の整地などの準備工をしたほか、6月16日より1区の機械掘削に着手した。なお、調査区内に残っていた旧市営住宅のコンクリート基礎については、協議によって調査時には撤去しないことになった。機械掘削の範囲は現地表下約1.5m間の現代整地層および近現代の作土層とし、以下の約0.5～0.8mの各層については人力で掘削して遺構・遺物の検出と調査を行った。発掘調査が進展するにしたがって、当地域の地山層と考えられた第6層が現在の地表面から比較的浅い位置に拡がること、予想以上に江戸時代の作土層が厚く、耕作に伴う踏込みも地山層まで及ぶことが判明した。加えて試掘調査地に確認された古代以前の暗色帯とみられる地層についても、江戸

時代以降の耕作によって攪拌されて1区の一部を除き遺構の埋土以外に地層としては残っていないことも判明した。この間、適時記録保存のための実測や写真撮影を行ったほか、9月1・2日には写真撮影および写真測量を専門業者に委託して実施した。1区は9月21日に、2区は9月10日に基本的な発掘調査を終えて、翌日から2区の埋戻しに着手した。9月24日には1区を含めて調査区の埋戻しを終えた。その後、調査機材の搬出や出入り口のゲートの撤去および鋼板塀の復旧をして、9月28日にはすべての作業を完了した。

平成23年6月から報告書の作成作業にかかり、出土遺物は遺物台帳に登録後、遺構や地層ごとに整理して、洗浄・注記・抽出および

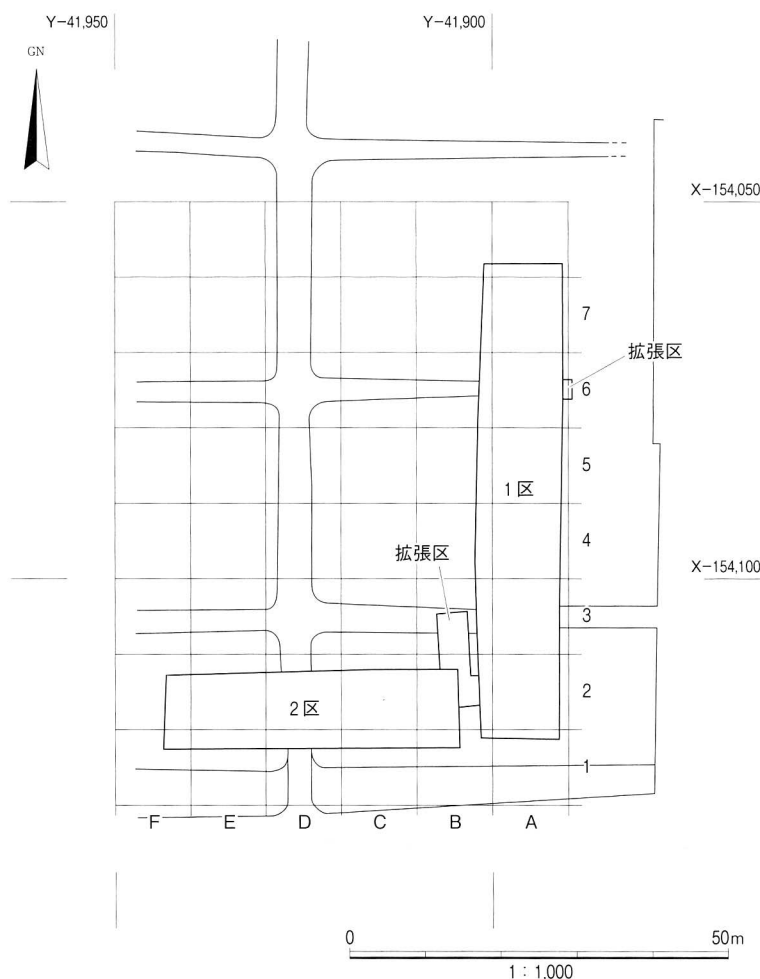


図5 調査区配置図



写真1 重機掘削状況



写真2 人力掘削状況

接合のあと実測図を作成した。それぞれの実測図はデジタルトレースして報告書の挿図にした。また、地層や遺構の図面類は平面図と断面図の調整など、基本的な整理を経た後、本報告に掲載する遺構および地層断面図をデジタルトレースして挿図にした。発掘調査時に撮影した遺構や地層の写真は、それぞれファイルに整理して収納したものの中から報告書の図版や挿図の版下用に抜粋した。また、遺物写真については写真図版用に撮影したものを編集し、報告書に掲載した。これらの諸作業を行って本報告書を刊行した。

表2 発掘調査の期間など

調査次数	調査地番	面積	調査期間	担当者
KR10-1	平野区喜連西4丁目	1,063㎡	平成22年6月14日～ 同年9月28日	成海佳子

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序

調査地の現地表面の標高はTP+5.3～5.4mあり、周囲の道路面よりよりやや低い位置にある。また、調査地の南側に位置する瓜破北遺跡の北部地域の現地表面と当地域の現地表面の標高差は約0.4mあり、瓜破北遺跡から喜連西遺跡に向かってわずかに下がっている。本調査では現代の盛土(第0層：層厚1.3～1.6m)下から3.5m間で第1～10層を確認した(図6・7、表3)。本報告では1区の東壁地層断面を基本層序として記述する(図6)。

第1層：オリブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト層で、層厚は5～20cmあり、下面には耕作に伴う鋤溝が見られた。近現代の作土層である。本層上面の標高はTP+4.0～4.2mあり、1区は2区に比べて幾分高くなっている。

第2層：オリブ褐色(2.5Y4/3)細礫混り粘土質シルトからなる作土層である。本層の層厚は10～30cmあり、上面の標高はTP+4.0m前後ある。江戸時代の肥前磁器および瓦の細片を含む。2区の第2層の層厚は1区に比べて倍近くあったが、これは当地域の圃場を整備した際に2区に客土をして1区と同じ高さに揃えた結果と考えられる。本層の上面では1区で真南北方向の水田畦畔を、2区では真南北および真東西方向の水田畦畔を検出した。

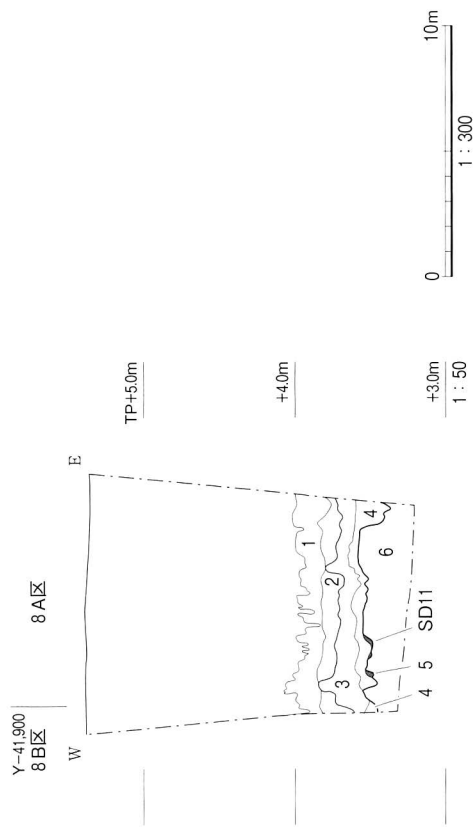
第3層：暗オリブ色(5Y4/3)細礫質シルトからなる作土層で、層厚は5～25cmある。2区の1C～E区の本層下面では多数の踏みみや耕作痕跡が観察された。

第4層：灰オリブ色(5Y4/2)細礫質シルトからなる作土層で、層厚は10～20cmある。1区のほぼ全域で本層の下面から鋤溝群および偶蹄類の足跡群が確認された。本層は室町時代の土師器・瓦器の細片を含む。

第5層：黒褐色(2.5Y3/1)～暗オリブ褐色(2.5Y3/3)シルトで、地層としては1区の5A～6A区で確認された以外は遺構内の埋土として分布していた。本層の層厚は残りの良いところで10cm前後あり、風化した弥生土器の細片を含むことから弥生時代以前の暗色帯の可能性がある。第5層は2区ではまったく確認されなかったが、これは後世の水田の造成の際に削平されたのであろう。本層の上面ではSB61・SA70などを検出した。

第6層：明黄褐色(2.5Y6/6)～灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルトからなる当地域の低位段丘を形成する地層である。本層上面の標高は微高地状を呈する1区の2A～6A区がTP+3.7m前後あり、1区の北端の8A区および2区西部の1F区はTP+3.4～3.6mで周囲に比べて幾分低い。本層の層厚は45cm前後あり、上面では弥生時代終末の遺構を検出した。なお、本層の上面で検出した弥生時代の遺構内から後期旧石器時代の石器や縄文時代の石器が出土したが、これらの本来の層準についてはここでは以

(北壁)



(東壁)

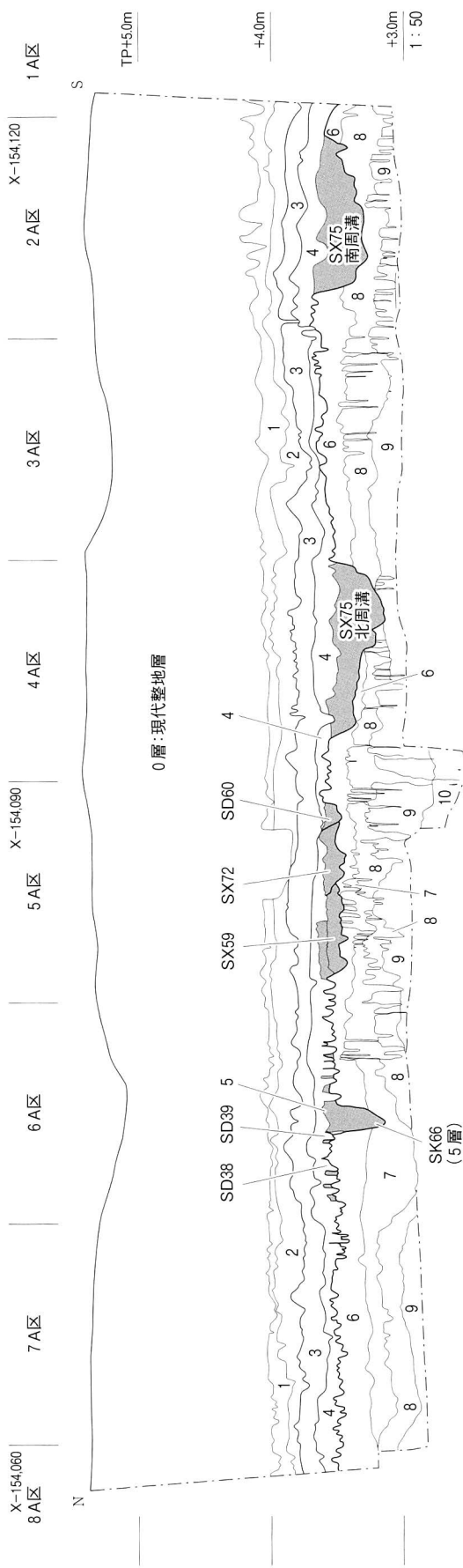


図6 1区北壁および東壁地層断面図

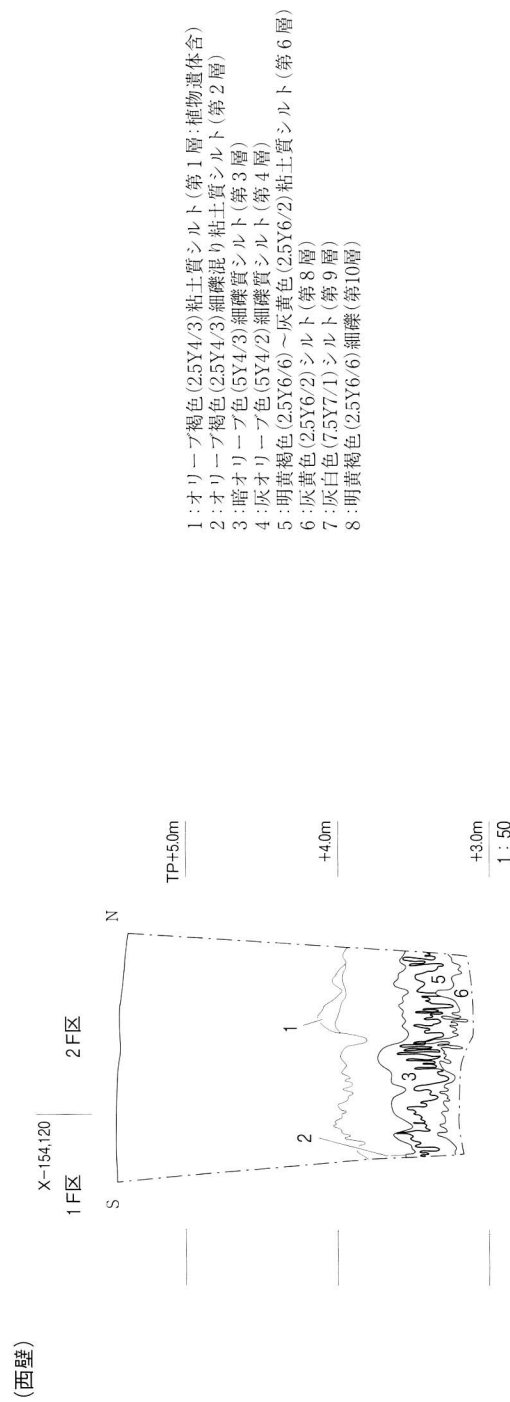
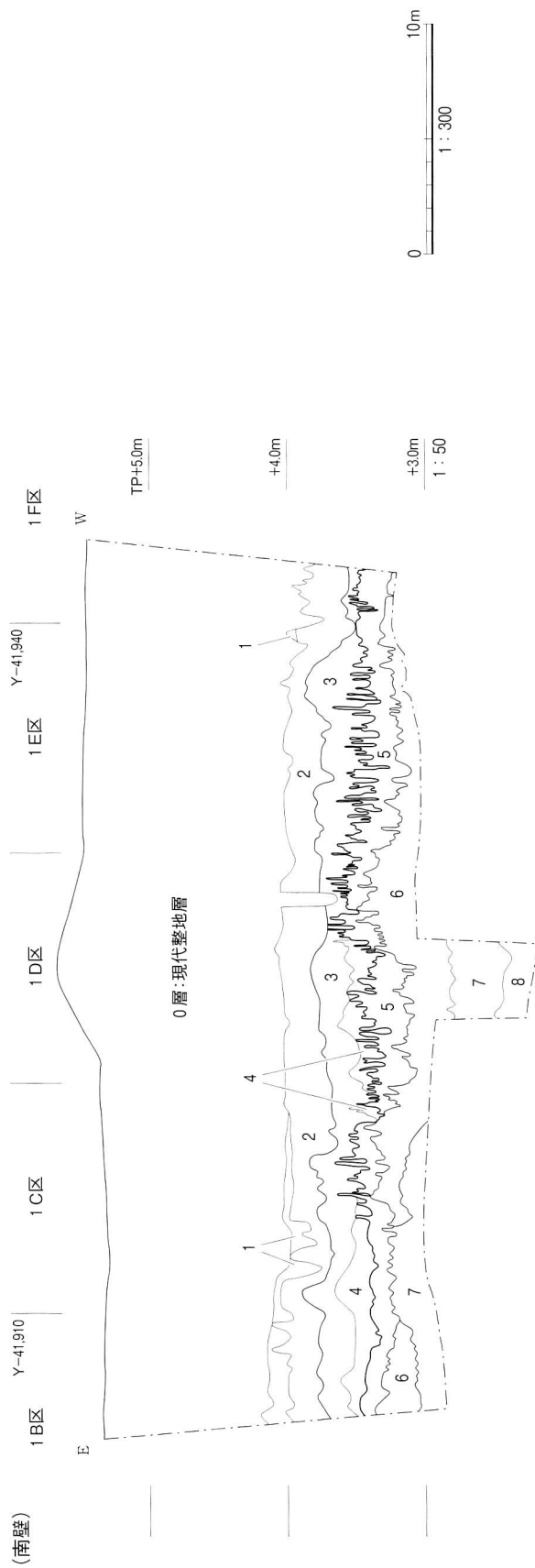


図7 2区南壁および西壁地層断面図

表3 層序表

層序	主な岩相	特徴	層厚 (cm)	主な遺構	主な遺物	時代	瓜破北 基本層序
第0層	現代盛土	盛土	130～ 160			近・現代	0
第1層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト	作土	5～20	▼鋤溝			1
第2層	オリーブ褐色(2.5Y4/3)細礫混り粘土質シルト	作土	10～30	←SR101～105	肥前磁器・瓦	江戸時代	2A
第3層	暗オリーブ色(5Y4/3)細礫質シルト	作土	5～25	▼踏み込み、耕作痕			2B
第4層	灰オリーブ色(5Y4/2)細礫質シルト	作土	10～20	▼鋤溝、足跡	瓦器・土師器	室町時代	3A
第5層	黒褐色(2.5Y3/1)～暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト	暗色帯	10前後	←SB61・SA70	風化した弥生時代の 土器・石鏃	弥生終末以前	5B
第6層	明黄褐色(2.5Y6/6)～灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルト		45前後	←SK66・SX75・SP37	縄文時代の石鏃 後期旧石器時代の石器	縄文～旧石器	11B以下
第7層	にぶい黄色(2.5Y6/3)細礫質シルト	水成層	10～40				11B以下
第8層	灰黄色(2.5Y6/2)シルト	水成層	20～30				11B以下
第9層	灰白色(7.5Y7/1)シルト	水成層	20以上				11B以下
第10層	明黄褐色(2.5Y6/6)細礫	水成層	20以上				11B以下

凡例： ↓ 基底面検出遺構 ▽ 地層内検出遺構 ← 上面検出遺構 ▼ 下面検出遺構

下のように考えておきたい。喜連西遺跡の第6層は、火山灰分析や上下の層準について十分な検討を行っているわけではないが、先述したように第5層は弥生時代終末以前の暗色帯であること、第6層の層相が瓜破北遺跡の後期旧石器時代の地層という第11B層に対比される。したがって、喜連西遺跡の第6層は、長原遺跡標準層序の低位段丘構成層の最上部層であるNG13B層[大阪市文化財協会2002b]に対比される可能性が高く、当地域も河内台地末端から北に派生した後期旧石器時代の地層を含む低位段丘構成層が埋没していることを裏付けている。本層の上面ではSP37・SK66・SX75ほかの弥生時代終末の遺構を検出した。

第7層以下はトレンチ調査で確認した当地域の低位段丘構成層と考える地層である。ここでは各層の岩相の概略を述べておく。

第7層：にぶい黄色(2.5Y6/3)細礫質シルトで、層厚10～40cmの水成層である。

第8層：灰黄色(2.5Y6/2)シルトで、層厚20～30cmの水成層である。

第9層：灰白色(7.5Y7/1)シルトで、層厚20cm以上の水成層である。

第10層：明黄褐色(2.5Y6/6)細礫で、層厚20cm以上の水成層である。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は1区の2A～6A区の第6層の上面から検出されたが、一部の遺構を除き後世の耕作で攪乱および削平されて残りは良くなかった(図8・9)。また、2区では弥生時代に属する遺構や遺物は認められなかった。以下、1区の弥生時代の遺構と遺物について時期を追って記述する。

SK66 6A区に位置する長径約1.7m以上、短径約1.5m、深さ約0.5mの土壌である(図10)。掘形の断面の形状は楕円状を呈している。埋土は下部が水つきの暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質シルト、上部が褐灰色(10YR4/1)粘土質シルトや黄褐色(2.5Y5/6)粘土質シルトの偽礫および土器片、炭化物を多く含む暗褐色(10YR3/4)細粒砂質シルト・黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトである。底はロート状に開く遺構の上部から筒状に細くなっており、掘形に沿うように弥生土器が投棄されたような状態で出土した。弥生土器は器面が風化しており、同一個体として接合したものは少なく、弥生時代中期後葉に属する1～16および同終末の17～47が混在していた(図11・12)。土器片や炭化物を多量に含むことからいわゆるゴミ穴と考えられる。

1は口縁部の外端面に2条の凹線文が巡る細頸壺の口頸部片である。外面を細かい縦方向のハケで調整している。2も細頸壺の頸部片である。内面をユビオサエで整えている。3は口縁部が2段に開く広口壺で、器体の内外面をヨコナデ調整している。口縁部の上端面をわずかに丸くおさめる。4は壺の体部片で、器面が磨滅しているため、調整は不明である。5は外面に櫛描直線文と波状文を施した壺の体部片である。6・7は広口壺の口縁部片で、端部を垂下している。口縁部の外端面に6は刺突文を、7は櫛描簾状文と刺突文を施している。8は広口壺の口縁部片で、上下を拡張している。丸味のある口縁部の外端面を櫛描簾状文と刺突文および3個一対の円形浮文で加飾している。9・10は口縁部を上下に拡張した広口壺で、口縁部の外端面に9は櫛描簾状文と櫛描列点文を、10は3段の櫛描簾状文を施している。10の頸部の外面には櫛描簾状文が見られる。11は口縁部が直線的に開く甕で、器体の調整は口縁部の内外面がヨコナデ、内面は板状工具によるナデである。12は口縁部が緩やかに開く小型の甕である。口縁部の内外面をヨコナデ調整している。13・15は壺の底部、14・16は甕の底部とみられるものである。15の器面調整は外面が左上がりの細筋のヘラミガキで、内面は左上がりの粗いハケである。13の内面はユビオサエで整えている。14・16は器面の残りが悪いいため、調整は明らかでない。

以上の土器の所属時期は、細頸壺の凹線文や口縁部を上下に拡張した広口壺の形態や文様構成からみて、弥生時代中期後葉(河内Ⅳ－3様式)と考える。

17～33は甕で、17・18・20・21・27・28・30～32は口縁部が直線的に開くもので、出土した甕の口縁部の過半数を占めている。このほか、口縁部が緩やかに開く19、直線的に開いたあと、上端が短く開く29、一旦外反したあと、受け口状におさめる33がある。体部の外面を17・18・20・33は右上がり、19・21は横方向、30は縦方向、31・32は左上がりの平行タタキ(4本/1cm)で整形している。体部内面の調整は17・20が横あるいは縦方向のハケのあと横方向のナデ、18・21・29は横方向のナデ、33

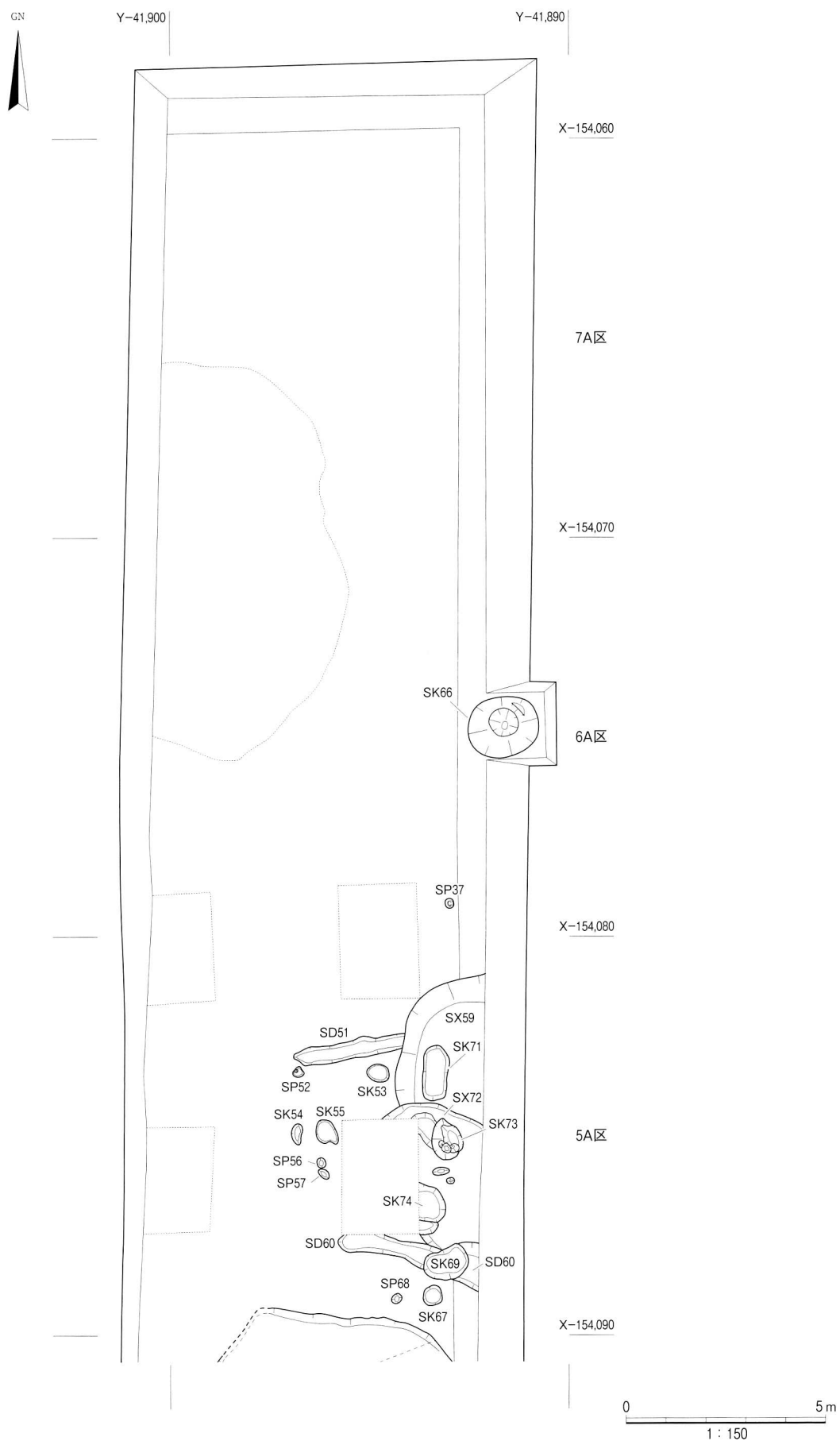


図8 第6層上面遺構配置図(1)

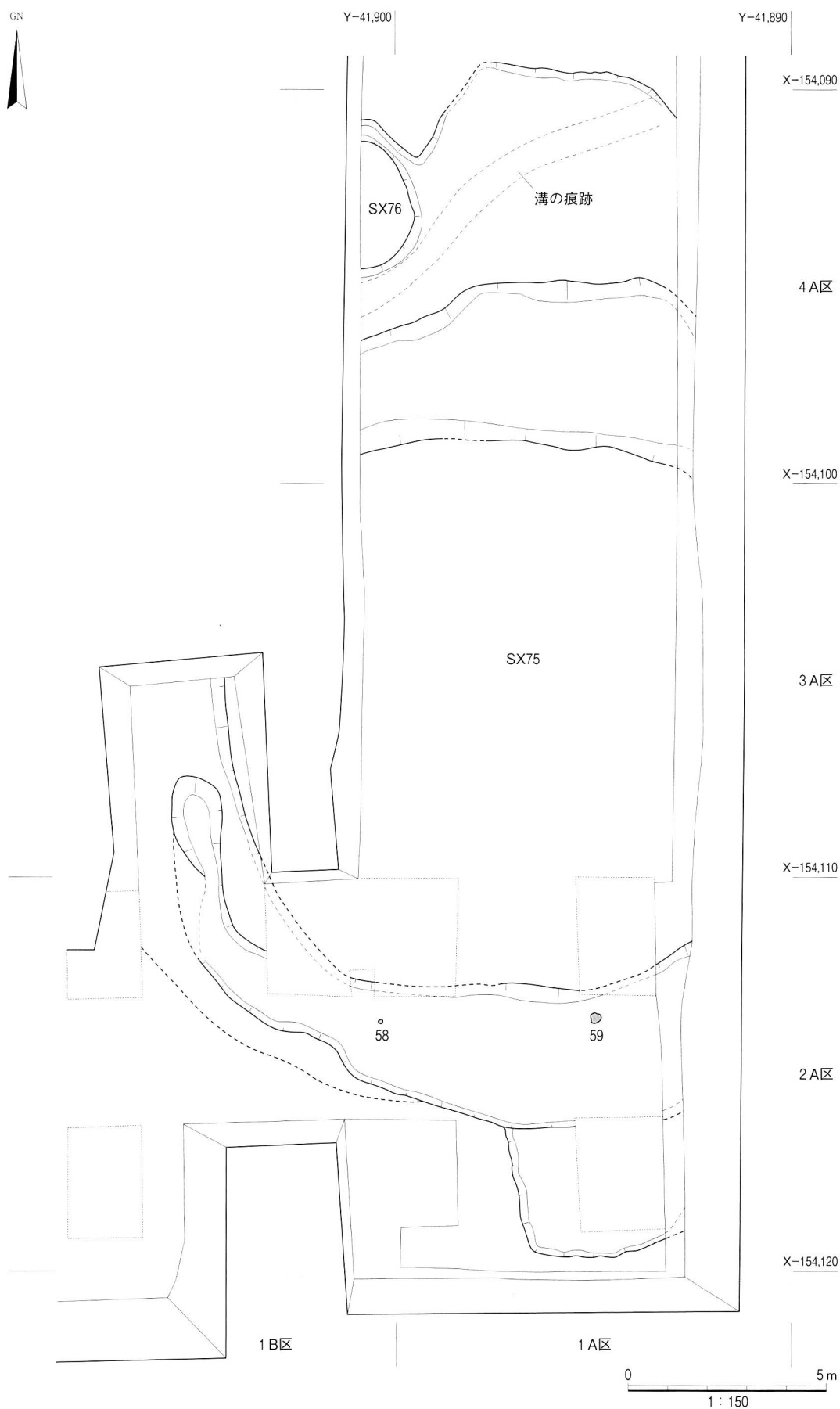


図9 第6層上面遺構配置図(2)

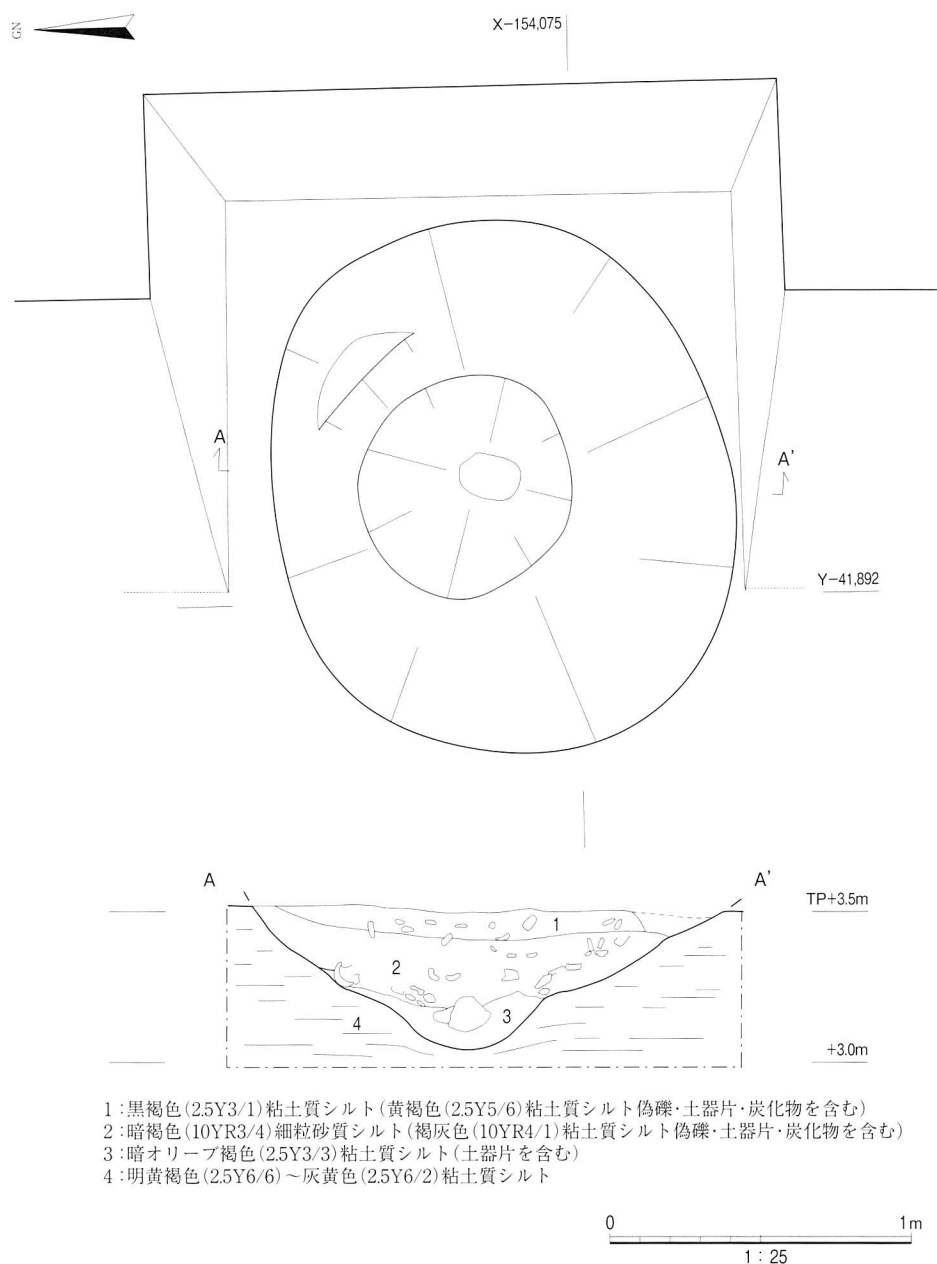


図10 SK66平面・断面図

は右上がりのナデ、19・30・31は時計回りのヘラケズリである。体部が丸い28は外面を左上がりの粗いハケで、内面を粗いハケ状のナデで調整している。22～26は甕の底部で、いずれも器体の外面を右上がりの平行タタキで整形している。底部の形態は体部下半から突出する23以外は低平で、22・24は裏面中央部が凹む。

34は口縁部が頸部の上端から水平に開く壺である。口縁端部を上方にわずかに肥厚しており、内外面の調整は細かいハケのあとヨコナデである。35～42は壺の体部あるいは底部とみられるもので、体部外面の調整は41が縦方向のヘラミガキ、42は縦方向の細かいハケである。なお、壺とみた38は、器面の風化が進んでおり、調整は明らかでないが、器体の形態や胎土は平野馬場遺跡のSK170から出土した播磨西部産の可能性が高い広口壺112に酷似している[大阪文化財研究所2011]。39の底部裏面は浅く

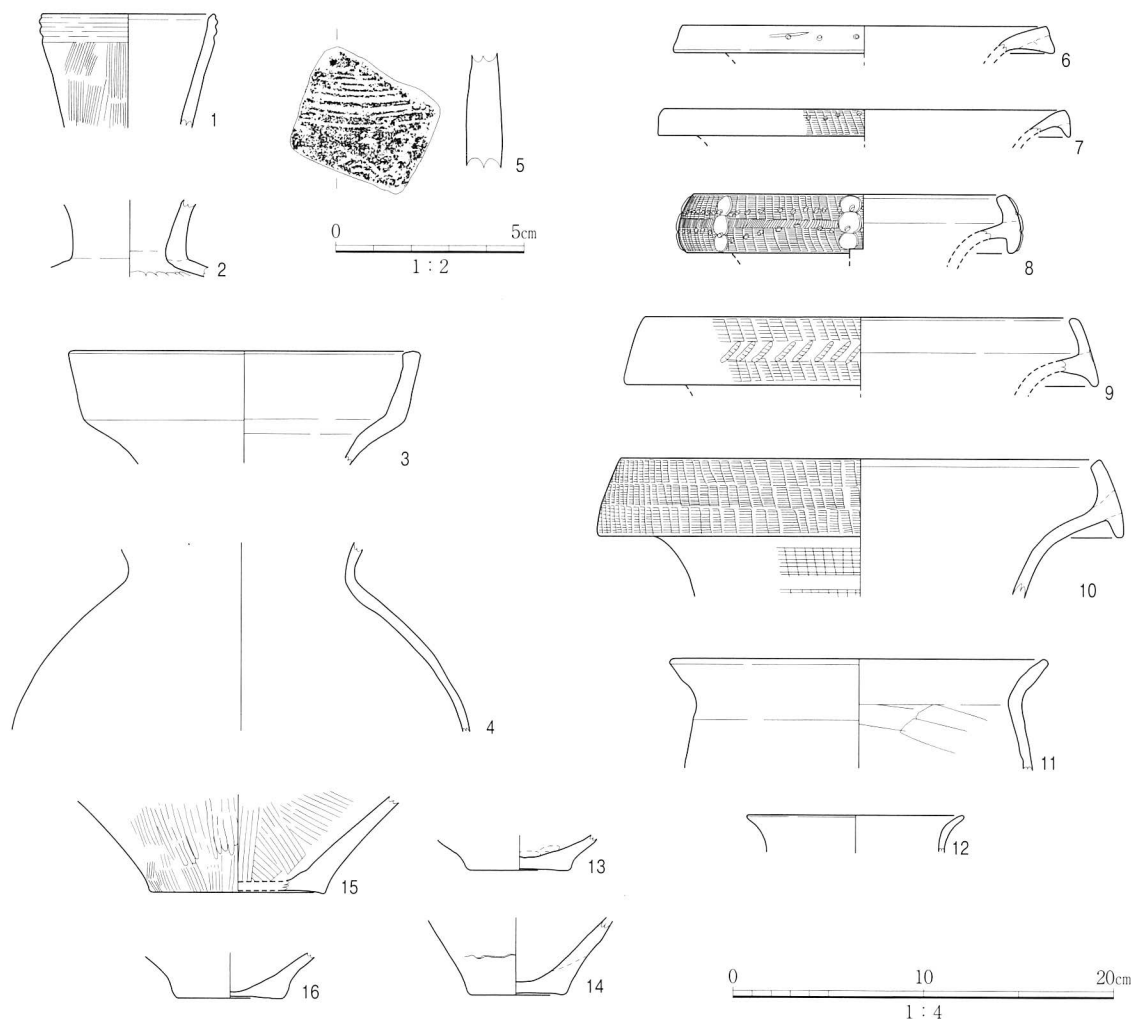


図11 SK66出土遺物実測図(1)

凹んでおり、木葉の圧痕がある。

43は体部の中央に最大径がある鉢で、口縁部は一旦外反したあと立つ複合口縁である。器体の調整は口頸部の内外面がヨコナデ、体部の外面は左上がりのハケ、内面は縦から横方向のヘラケズリで、頸部の内面にはヨコハケが残る。

44～47は高杯の杯部あるいは脚部の破片である。44・45の口縁部は底部から体部を経て外上方に開く。46は口縁部が体部から緩やかに開く杯部である。47は緩やかに開いた脚裾部で端部を面取る。

48・49はともに砂岩製の敲石である。前者は最大長7.40cm、最大幅4.95cm、最大厚3.0cmで、表面の風化が著しい。下端および側面に敲打痕が見られる。後者は最大長5.35cm、最大幅3.55cm、最大厚2.5cmで、表裏面に敲打痕がある。側面には磨痕が見られる。以上の石器は、共伴した弥生土器と同時期の可能性が高い。

これらの遺物のうち土器の所属時期は、体部が球形に近い甕17や体部の内面をヘラケズリ調整する甕30・31、讃岐や阿波地域に分布の中心がある口縁部が水平に開く広口壺34、播磨西部地域の搬入品の可能性のある壺38、複合口縁部の鉢43などから構成されることが、布留式土器を含まないことを考慮すると庄内1～2期に属するものであろう。

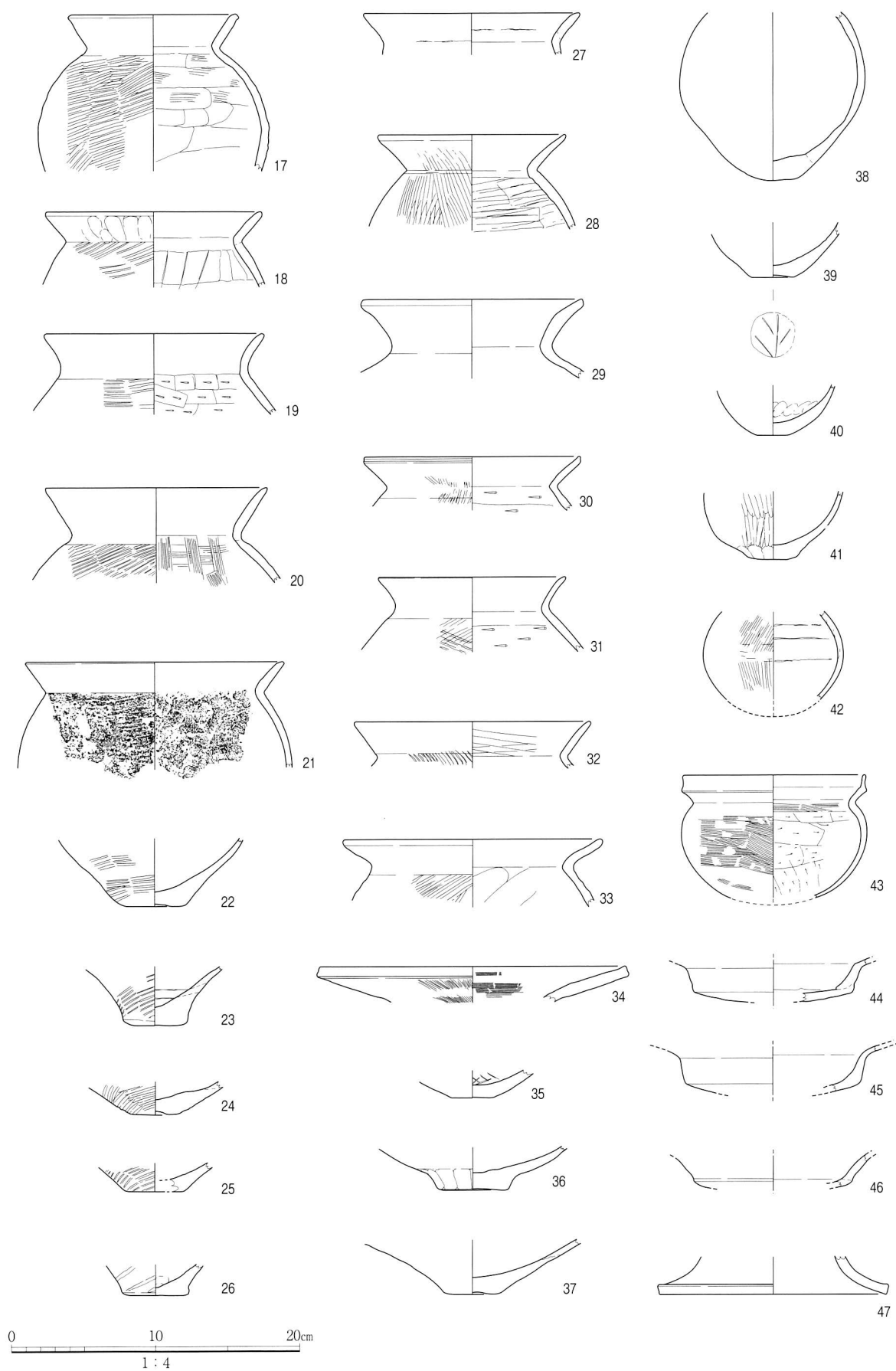


図12 SK66出土遺物実測図(2)

SX59 5A区に位置する長辺3.8m以上、短辺2m以上、深さ0.2mの落込みである(図14)。遺構の底は平坦な面をなし、西側掘形の近くでSK71を確認したほか、遺構の南側をSX72に掘り込まれていた。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトで、弥生土器の細片および炭化物が出土した。なお、本遺構内および周辺の第6層の上部から後述するような後期旧石器時代に属する可能性の高いサヌカイト製の石器50～54が出土した(図15)。

50は最大長5.2cm、最大幅2.85cm、最大厚1.15cmの、重さ21.6gの楔の可能性のある石器である。上下端に細部調整剥離がある。51は最大長2.7cm、最大幅1.95cm、最大厚0.45cm、重さ1.8gの剥片である。52は最大長2.4cm、最大幅2.1cm、最大厚0.25cm、重さ1.9gの剥片である。53は最大長2.45cm、最大幅2.60cm、最大厚0.3cm重、さ2.1gの剥片である。54は最大長3.45cm、最大幅3.20cm、最大厚0.60cm、重さ6.9gの折損した剥片である。以上の石器や剥片は弥生時代終末の土器片に伴出したが、埋土に第6層の偽礫を含むことや石器の表面が著しく風化していることから後期旧石器時代の石器の可能性はある。

SX72 5A区に位置する長辺3m以上、短辺約3m、深さ約0.3mの落込みで、SD60およびSK69・73・74に掘り込まれている。埋土は第6層の偽礫を含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト～暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質極細粒砂で、弥生時代終末に属する土器の細片をはじめ、土製品が出土した(図16)。

55は直径1.45cmの土製丸玉である。紐孔は見られない。単体で出土しており、用途については不明である。

SK53 5A区に位置する長径0.55m、短径0.45m、深さ0.05mの浅い土壇である。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細礫質シルトで、遺物は出土しなかった。

SK54・55 5A区に東西に並んで位置する不整形な土壇で、深さは0.10m前後ある。埋土はともににぶい黄褐色(10YR4/3)細礫質シルトで、遺物は出土しなかった。

SK69 5A区に位置する長辺1.15m、短辺0.80m、深さ0.20mの不整形な土壇である。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)細礫質シルトで、遺物は出土しなかった。

SK71 SX59の底で検出された長辺1.40m、短辺0.70m、深さ0.60mの隅丸長方形の土壇である。埋土は第6層の偽礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は出土しなかった。

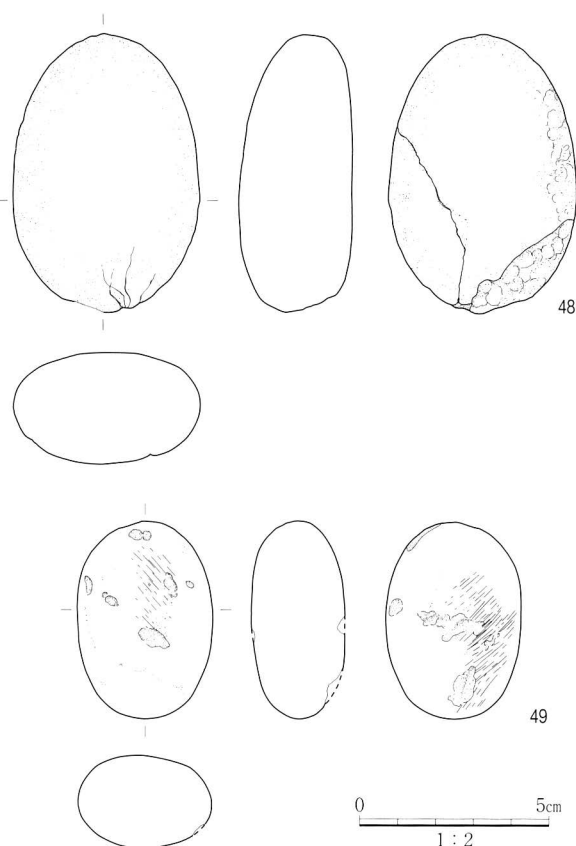


図13 SK66出土遺物実測図(3)

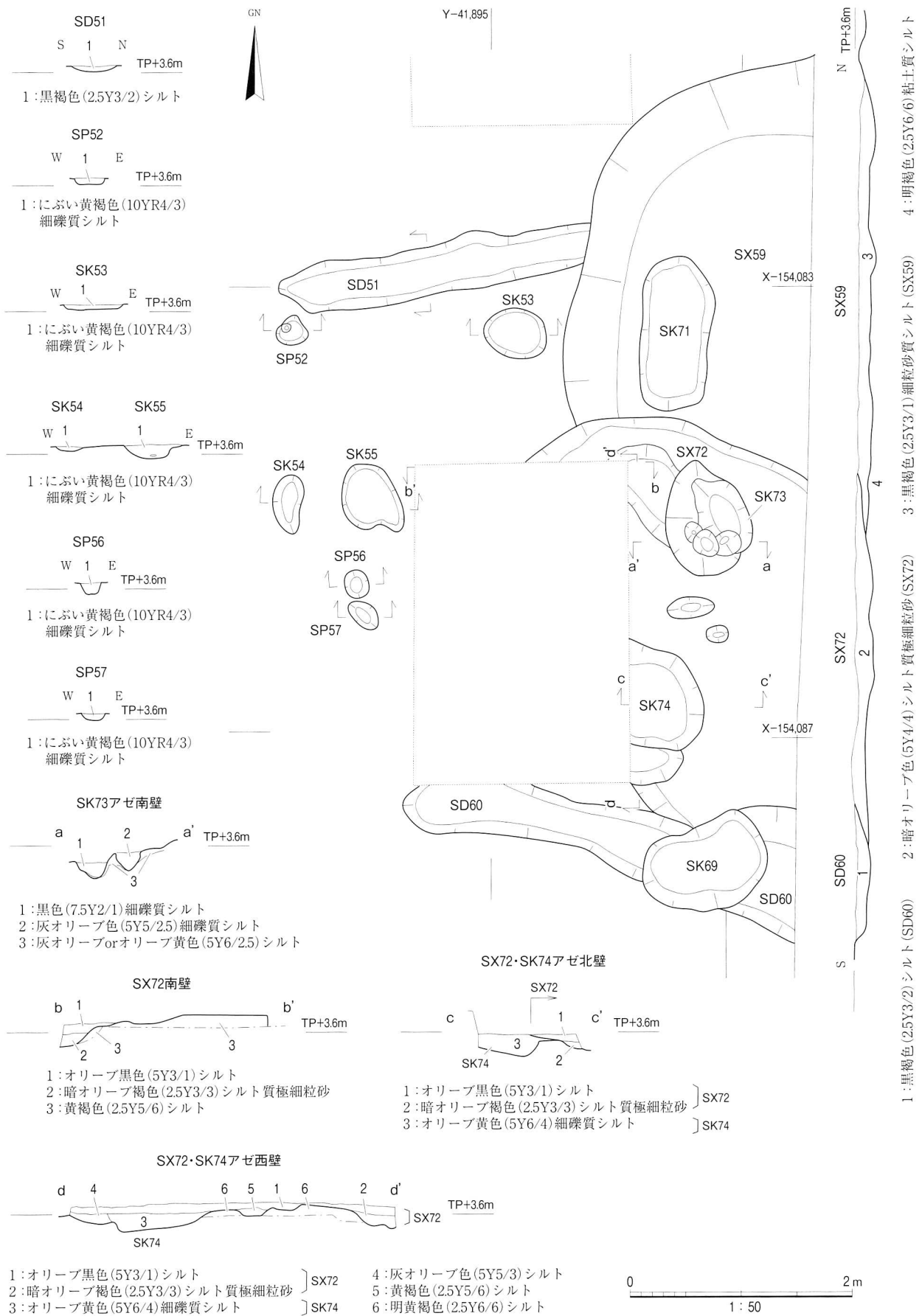


図14 第6層上面遺構平面・断面図

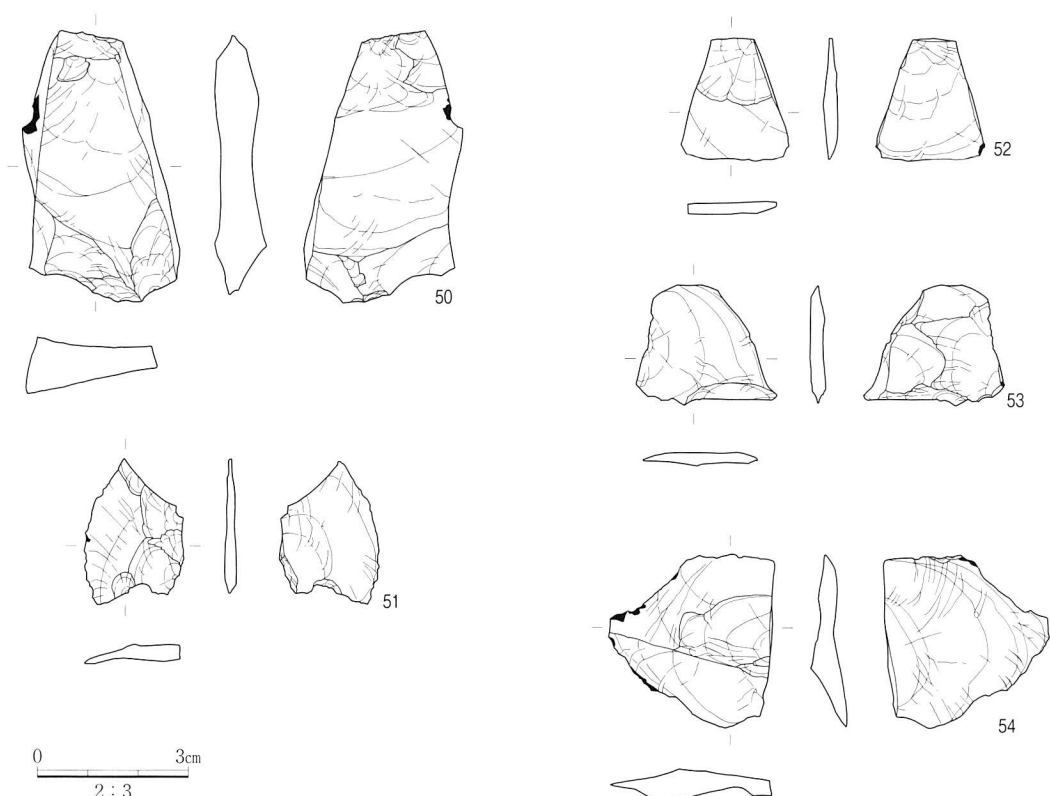


図15 SX59および周辺出土遺物実測図

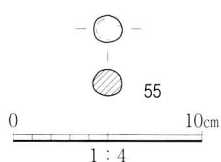


図16 SX72出土遺物実測図

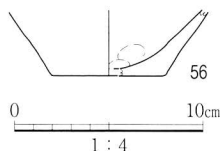


図17 SK73出土遺物実測図

SK73 5A区に位置する長辺約1m、短辺0.76m、深さ0.30mの平面形が不整形な土壇である。埋土は黒色(7.5Y2/1)～灰オリーブ色(5Y5/2.5)細礫質シルトで、弥生土器の細片が出土した(図17)。土壇の底には3個の下に向かって細くなる小穴が見られることから樹木の根痕の可能性がある。

56は甕の底部片で、内底面をユビオサエで整えている。器体の外面は風化しており、調整は不明である。弥生時代中期後葉に属するものであろう。

SK74 5A区に位置する長辺0.7m以上、短辺0.9m、深さ0.40mの土壇である。埋土はオリーブ黄色(5Y6/4)細礫質シルトで、遺物は出土しなかった。

SP37 6A区に位置する長径0.23m、短径0.20m、深さ0.35mの小穴で、上端の径が底径に比べてわずかに大きい。小穴の底から約0.2mの位置に浮いたような状態で弥生時代終末の完形の鉢57が口縁部を上にして出土した(図18、図版7～8)。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)細礫質シルトで、若干の炭化物が見られたが、柱痕跡は確認されなかった。いわゆる土器埋納壇と呼ばれるものである。

57の体部は丸味のある平らな底部から内湾しながら立ち、口縁端部は外上方に開く。器体の調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部は内外面ともに不定方向のナデである。庄内2期に属するものであろう(図18)。

SP52・56・57 5A区に位置する直径0.20m前後、深さ0.1m前後の浅い小穴である。これらの埋

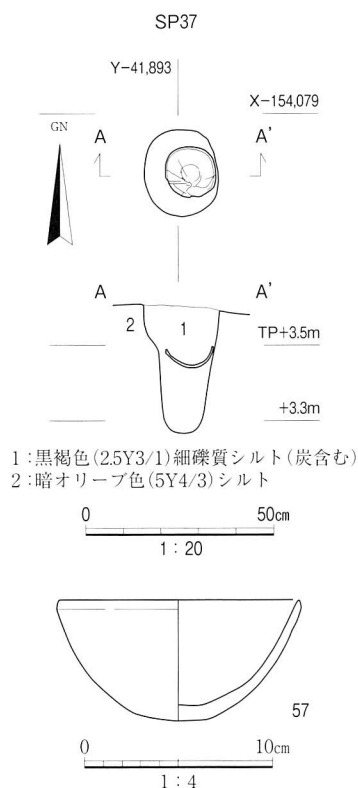


図18 SP37平面・断面図および
出土遺物実測図

土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細礫質シルトで、掘形が不整形なSP52には西に偏って直径0.06mの杭とみられる痕跡があった。これらの小穴では遺物は出土しなかったが、5A区に分布している土壌の埋土と基本的に変わらないことから、両者は同時期の遺構と考えられる。

SD51 5A区に位置する幅0.50m、深さ0.10mの東西方向の溝である。遺構の東部を弥生時代終末の落込みSX59に掘り込まれている。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)シルトで、遺物は出土しなかった。

SD60 5A区に位置する幅0.40～1.10m、深さ0.10～0.20mの東西方向の溝で、弥生時代終末のSX72を掘り込んでいる。埋土は水つきの黒褐色(2.5Y3/2)シルトで、遺物は出土しなかった。なお、SD60は東側約4.5mに位置するSD51と規模や方向および埋土が同じであることから注目されたが、溝の機能については明らかにできなかった。

SX75 2A～4A区にかけて位置する全長が約22mの墳丘墓で、墳丘の南北幅は約14mある(図19)。墳丘の上面は室町～江戸時代の耕作により攪乱されており、ここでは盛土はまったく確認されなかった。なお、北周溝の北側は周溝の検出面より南北約5.5m幅

でテラス状に窪んでおり、ここには幅約0.7mの南西から北東方向に延びる溝の痕跡があった。本溝は北周溝の埋土を除去したあとで確認されたことから墳丘墓に先行する時期の遺構と考えられる。

調査範囲内では墳丘および周溝の全貌は把握できなかったが、北・南周溝の幅は2.5～4.5mあり、深さは墳丘墓の検出面から約0.3～0.5mある。以下、南周溝から埋土および出土遺物について報告する。

南周溝内には下から加工時形成層とみられる第6層の偽礫を含むオリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト、黒色(5Y2/1)粘土質シルト、オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルトが堆積しており、底から0.05～0.15m浮いた状態で弥生土器58・59が出土した(図版6)。

58は南周溝の西部から出土した口縁部が2段に開く複合口縁壺で、口縁端部を下方に肥厚している。口縁部の下端には2個一対の竹管文を付加した円形浮文が巡る。胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓産の土器である。59は砲弾状を呈する甕の底部で、内底面をユビオサエで整えている。外面の調整は風化が進んでおり明らかでない(図20)。

60は最大長4.80cm、最大幅3.05cm、最大厚1.25cm、重さ15.6gで楔形石器の可能性がある。片面に剥片素材の自然面が残る。61は最大長4.05cm、最大幅3.20cm、最大厚1.55cm、重さ21.0gの剥片である。片面に自然面が残る。62は最大長2.80cm、最大幅3.95cm、最大厚0.55cm、重さ4.70gの剥片である。以上の石器の石材はサヌカイトである。

西周溝は拡張区で周溝の一部を確認したのみであり、幅は3m以上、深さは検出面から0.4m前後あった。埋土は機能時堆積層のオリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト、黒色(5Y2/1)粘土質シルト、加工

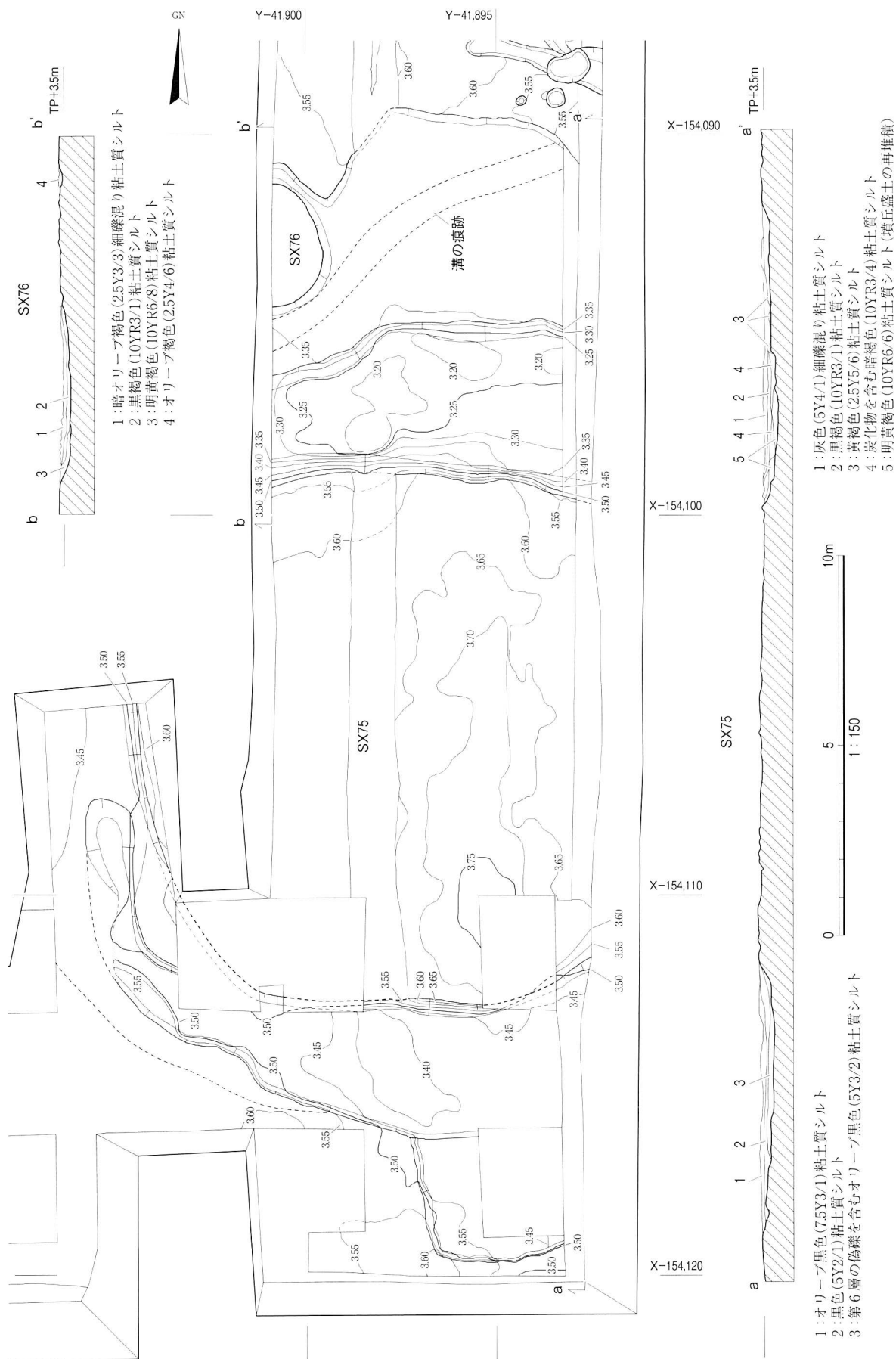


図19 SX75・76平面・断面図

時堆積層の第6層の偽礫を含むオリブ黒色(5Y3/2)粘土質シルトであり、機能時堆積層から弥生土器の細片や石器が出土した(図21)。

63は最大長4.30cm、最大幅3.20cm、最大厚1.00cm、重量14.90gの剥片である。下端を調整剥離している。石材はサヌカイトである。

64は最大長4.60cm、最大幅4.70cm、最大厚1.95cmの砂岩製の敲石である。下端に著しい敲打痕が見られる。全体に二次的な火を受けて赤変している。

北周溝の埋土は東西で岩相や色調が若干異なっていた。西部の埋土は機能時堆積層の黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、暗オリブ褐色(2.5Y3/3)細礫混り粘土質シルトで、墳丘の側には加工時形成層とみられる明黄褐色(10YR6/8)粘土質シルトの偽礫が確認された(図19)。北周溝東部の埋土は機能時堆積層の明黄褐色(10YR6/6)粘土質シルト、機能時堆積層の炭化物を含む暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト、墳丘盛土の偽礫とみられる黄褐色(2.5Y5/6)粘土質シルト、黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、灰色(5Y4/1)細礫混り粘土質シルトで、弥生土器65～70および石器71～74が出土した(図22)。

65～70は北周溝の東側から出土した土器である。65は口縁端部を下方に拡張した広口壺で、調整は器面が風化しており明らかでない。胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓地域から搬入された土器である。66は張りのある体部から短い口頸部が立つ直口壺である。体部の上端近くに櫛描直線文4条と竹管文を施している。口頸部の内外面を

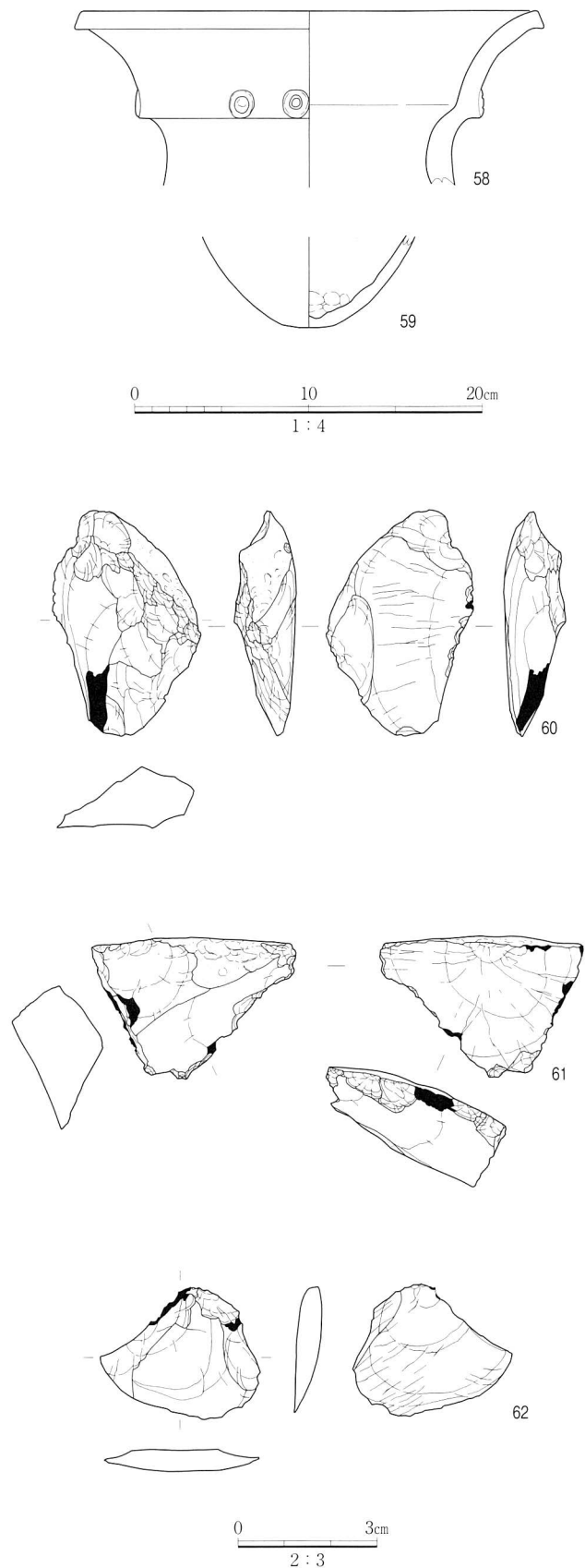


図20 SX75南周溝出土遺物実測図

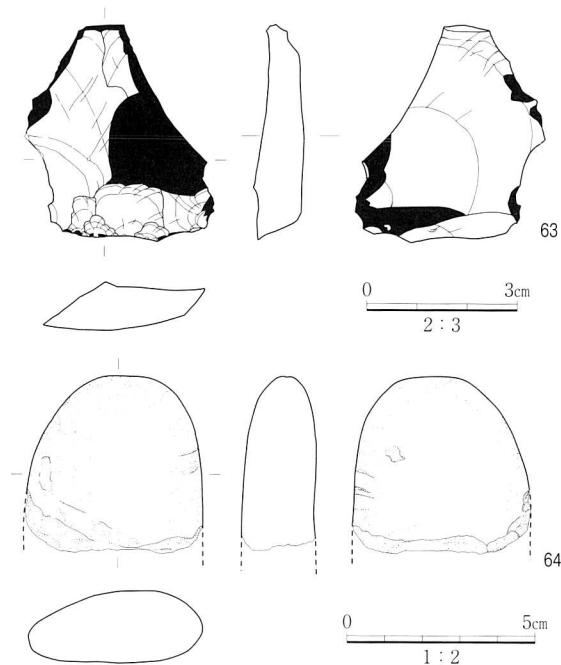


図21 SX75西周溝出土遺物実測図

ヨコナデ調整しており、体部内面はユビオサエで整えている。胎土中に雲母・角閃石粒を含む吉備地域から搬入された土器と考えられる。67は甕の口頸部から体部にかけての破片である。調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部の内面は時計回りのヘラケズリで、口縁端部をわずかに肥厚している。胎土中に角閃石粒を含む生駒西麓地域から搬入された土器である。68は蛸壺の口縁部片で、外から内に向けて紐孔を穿つ。器面の調整は内外面とも縦方向のナデである。69は裏面が浅く凹む甕の底部である。70は接置面を平坦におさめた甕の底部である。69・70ともに器面が風化しており、調整は明らかでない。

以上の南・北周溝から出土した弥生土器の所属

時期であるが、弥生時代中期後葉に属する65・70を除く、生駒西麓地域から搬入された複合口縁壺58・甕67をはじめ、甕底部59・直口壺66などは庄内2期に属するものと考えられる。

次に石器であるが、71は最大長2.65cm、最大幅1.05cm、最大厚0.25cm、重さ0.70gの横長の剥片を素材にした小型のナイフ形石器とみられるものである。背の一部に細部調整剥離がある。72は最大長2.60cm、最大幅1.70cm、最大厚0.55cm、重さ2.70gの剥片で、下端が折れている。73は最大長6.35cm、最大幅5.25cm、最大厚1.30cm、重さ51.0gの楔形石器である。薄手の剥片を素材にしており、左右に挟撃によって生じた剥離がある。以上の石器の石材はサヌカイトである。74は最大長7.20cm、最大幅6.10cm、最大厚2.50cm、重さ179.4gの砂岩製の敲石である。側面の片方を折損しているが他方には敲打痕が、表裏面にも磨った痕跡が見られる。

SX76 SX75の北周溝の北側にあるテラスの西部に位置する全長約4.5mのいわゆる方形周溝墓(墳丘墓)である。遺構の大半は調査範囲外のため、周溝を含む墳丘の形状については明らかでない。また、墳丘の形状は一見丸いように思われるが、これもSX75の周溝やテラスとの切り合い関係が不確かであり、本来の形状は不明である。墳丘の北東側の周溝の幅は0.4～0.7m、深さ約0.2mあり、埋土は機能時堆積層のオリーブ褐色(2.5Y4/6)粘土質シルトである。周溝内から遺物は出土しなかったが、墳丘の東側にあるテラス内では弥生時代中期後葉および同終末の土器の細片が出土している。本遺構は形態や周溝の埋土からみて、SX75とほぼ同時期に営まれた規模の小さな墳丘墓であろう。

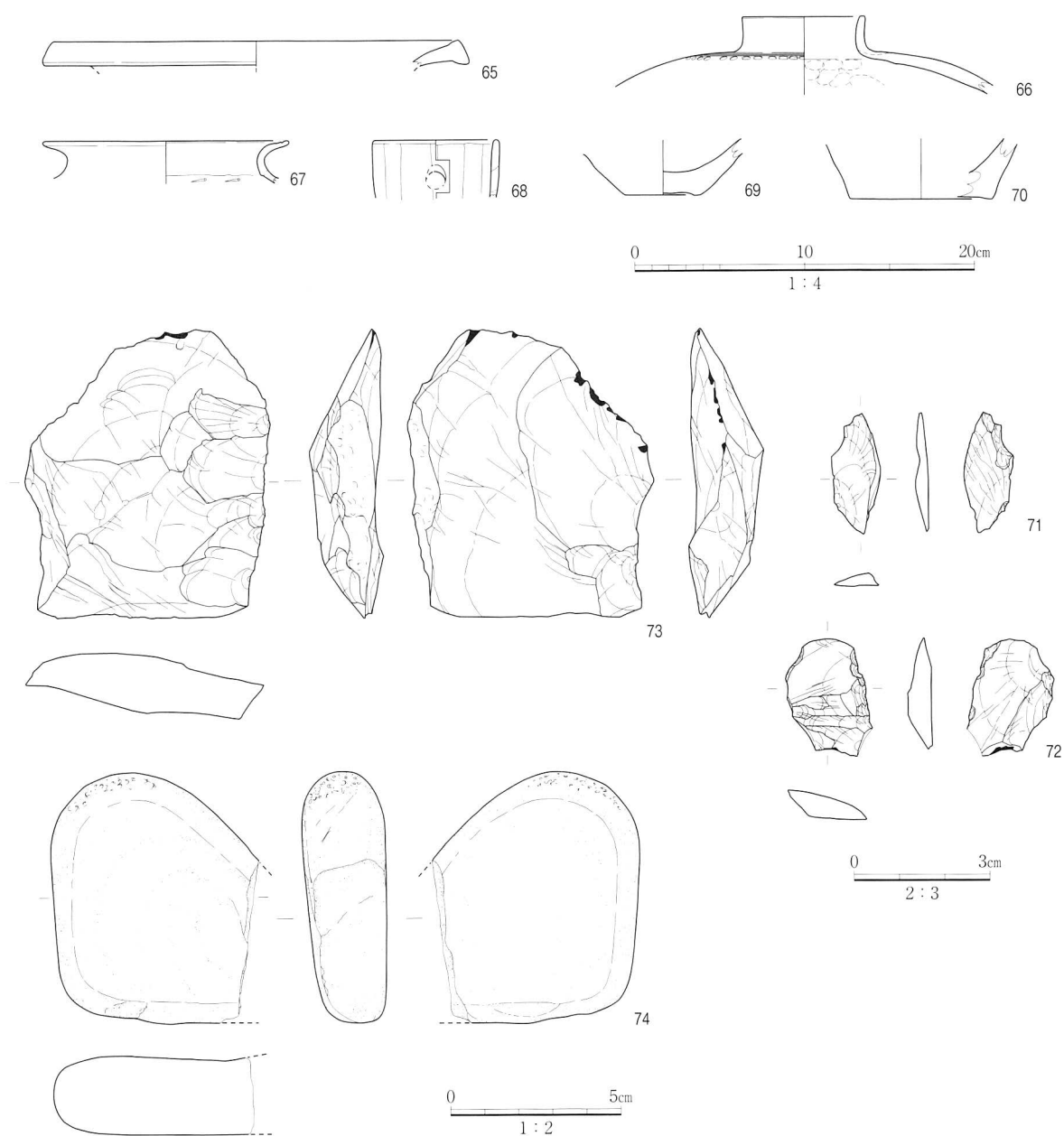


图22 SX75北周溝出土遺物実測図

第3節 室町時代の遺構と遺物

本調査では1区の北部で第4層下面からと、同区の南部の第5層の上面において室町時代の土器類や瓦の細片を含む掘立柱建物や小穴、耕作に関わる溝群や足跡群を検出した(図23～27)。以下、1区の南側から順を追っておもな遺構・遺物の記述をする。

SB61 3A区に位置する建物の中央を南北方向の溝SD77に切られた東西・南北2間×2間の掘立柱建物で、柱間寸法は南北2.8m、東西2.8～3.0mある。SP9の西側にあるSP8は建物の補修に伴う柱穴と考える。各柱穴の規模は0.25～0.40m、深さ0.20～0.35mあり、掘形のおもな埋土は浅黄色(5Y7/4)細礫質シルトで、柱痕跡は炭化物や土器片を含む灰オリーブ色(5Y5/3)粘土質シルト～黄色(5Y7/6)細礫質シルトである。SP1・4・6・8では直径0.10～0.15mの柱痕跡が確認された(図25)。

SA70 SB61の南東に位置する南北方向に並ぶ4個の柱穴SP62～65からなる長さ約10.5mの柵列とみられる遺構である(図24・25)。各柱穴は直径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mあり、掘形の埋土は暗オリーブ色(5Y4/3)シルトで、柱痕跡は黒褐色(2.5Y3/1.5)シルトである。遺物は出土しなかったが、埋土からみてSB61とさほど変わらない時期と考えられる。

SD02～07 7A区の踏込み群の北側に東西に並んで位置する幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.3mの土壌状の遺構である。遺構の主軸が南北方向の溝SD11と同じであること、埋土も暗褐色(10YR3/4)細礫質シルトでSD11の埋土とさほど変わらないことから、本来は鋤溝群を構成する南北方向の溝であったと考えられる。所属時期を示すような遺物は出土しなかった。

SK01 7A～8A区に位置する長径0.8cm、短径0.3cm以上、深さ0.3cmの不整形な土壌で、埋土は第6層の偽礫を含む灰色(5Y4/1)細礫混り粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

SD08～10 7A区に位置する南東から北西方向の幅0.3～0.5m、深さ0.1m前後の耕作に関わる溝の残存部である。これらは第4層下面から検出されており、埋土は暗褐色(10YR3/4)細礫質シルトで、弥生土器の細片が出土した。

SD11 1区の西側に位置する幅0.4～1.3m、深さ0.1m前後の南北方向の溝である(図23・26)。本溝は7A～6A区の中程にかけて位置する攪乱以南から南北方向のSD77と一部で接しながら並列している。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトで、南側のSD77を含めて溝の方位が当地域の条里制の方位と変わらないことから、坪境の溝の可能性はある。

SD36 6A～7A区に位置する幅0.2～0.4m、深さ0.1mの浅い溝で、後述する鋤溝群SD38～44を掘り込んでいる(図27)。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細礫質シルトで、鋤溝群と変わらない。本溝も耕作に伴う鋤溝とみられるが、これに伴う同方向の溝は調査区内では確認できなかった。

SD38～50 6A区以北に位置する幅0.2～0.6m、深さ0.05～0.1mの南東から北西方向の鋤溝群である。各溝は0.2～0.4m間隔で並んでおり、おもな埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細礫質シルト～明黄褐色(2.5Y7/6)シルトである。埋土から弥生土器の細片、古代の土師器・須恵器の細片、室町時代の

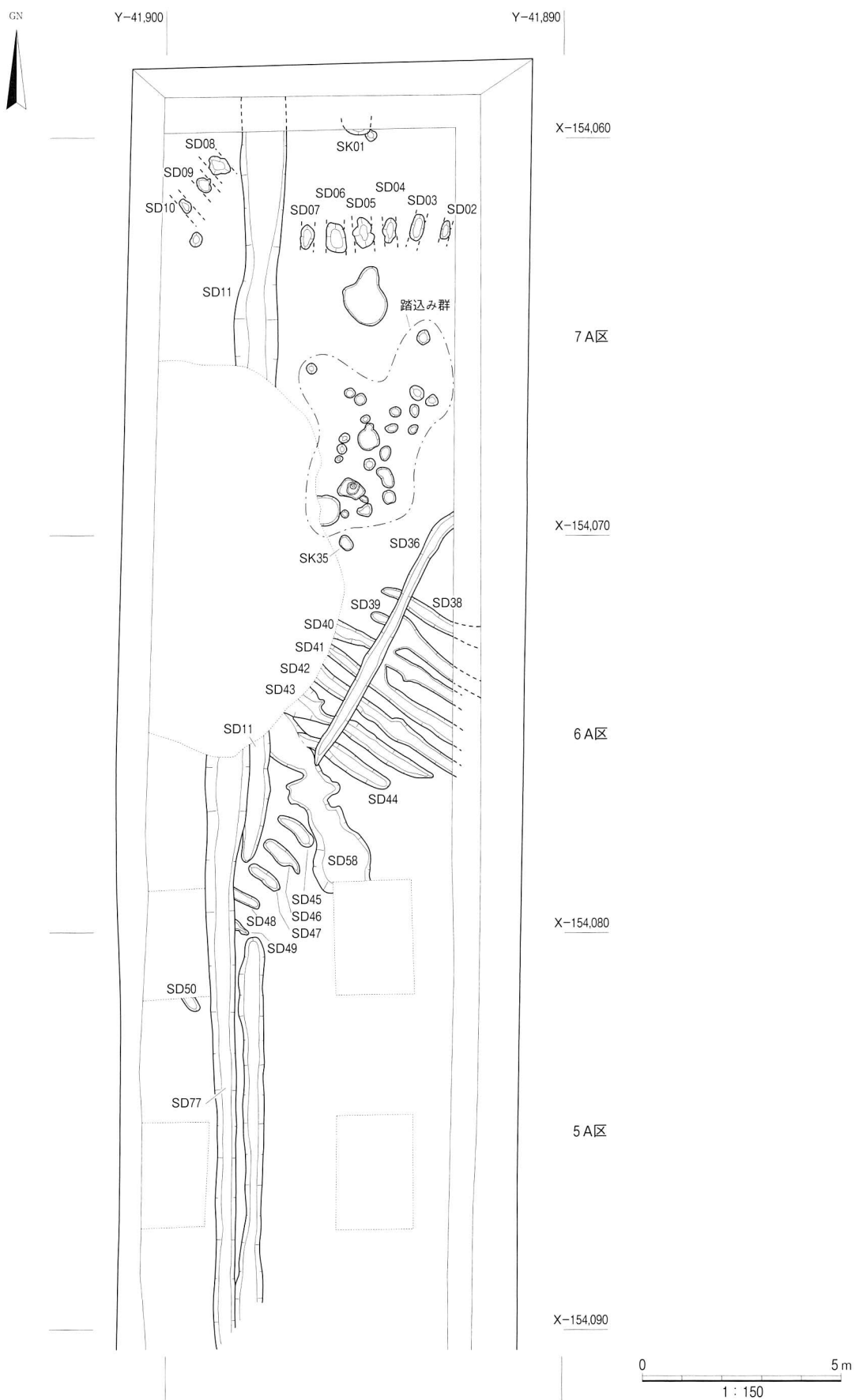


図23 第4層下面および第5層上面遺構配置図(1)

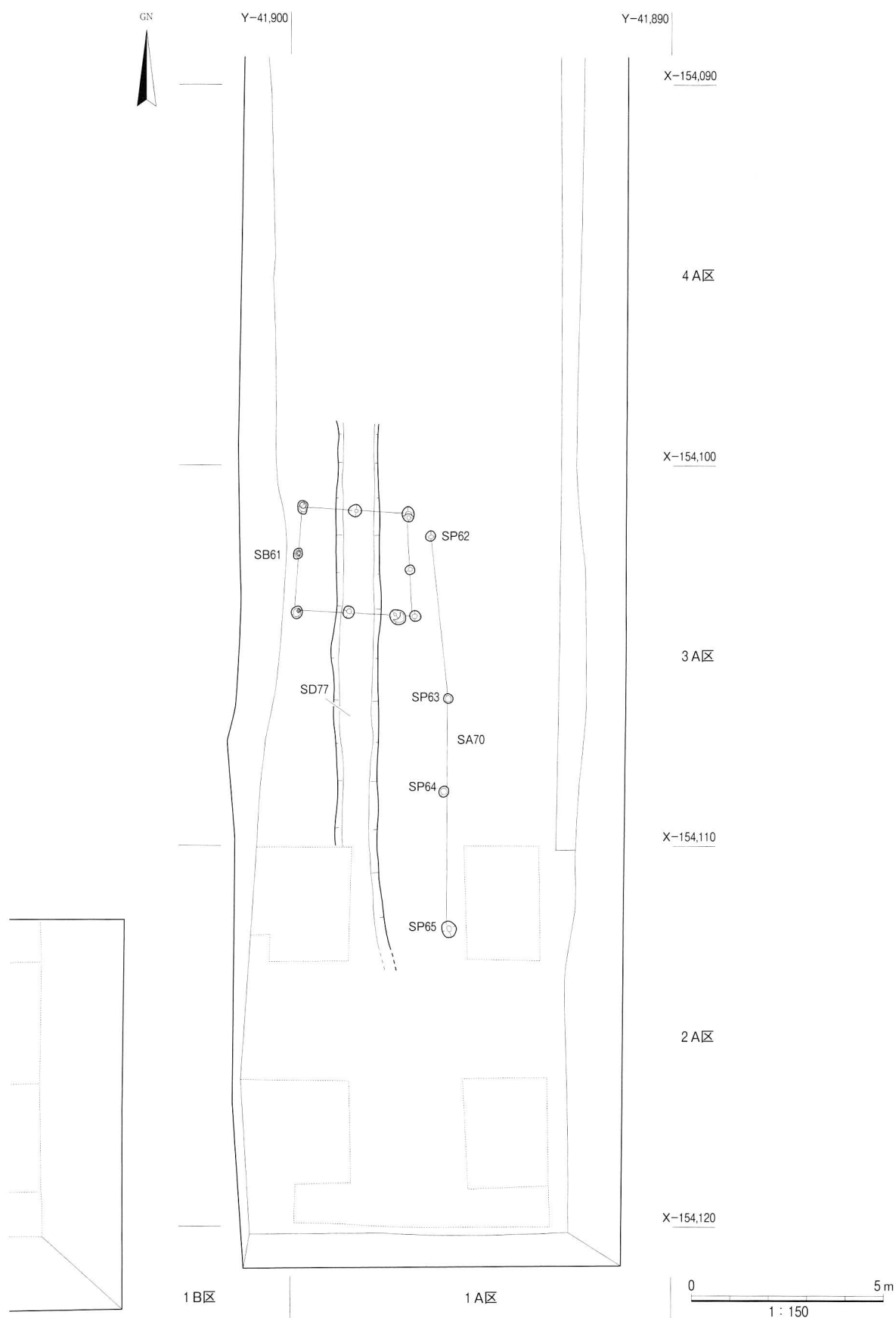


図24 第4層下面および第5層上面遺構配置図(2)

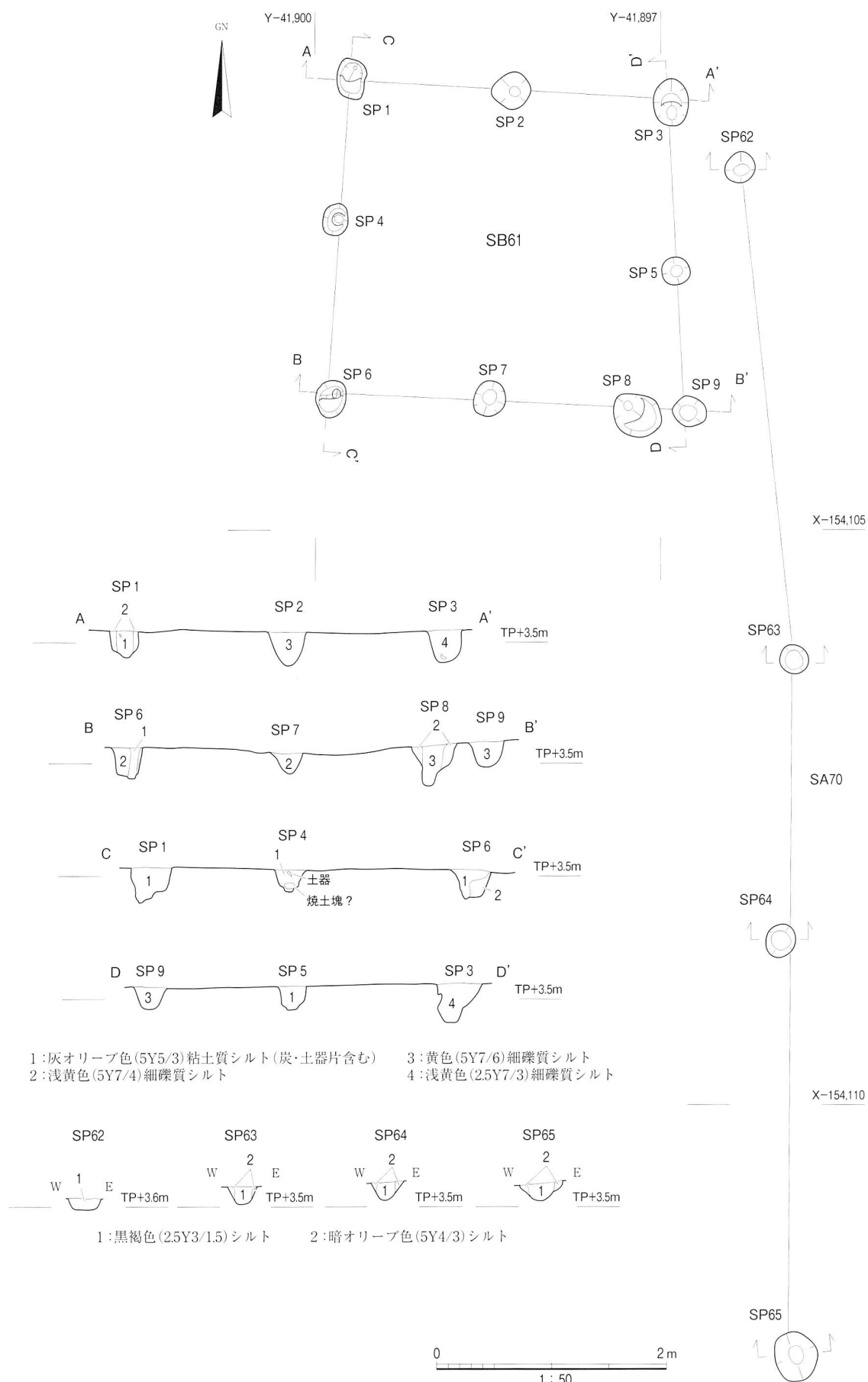


図25 SB61・SA70平面・断面図

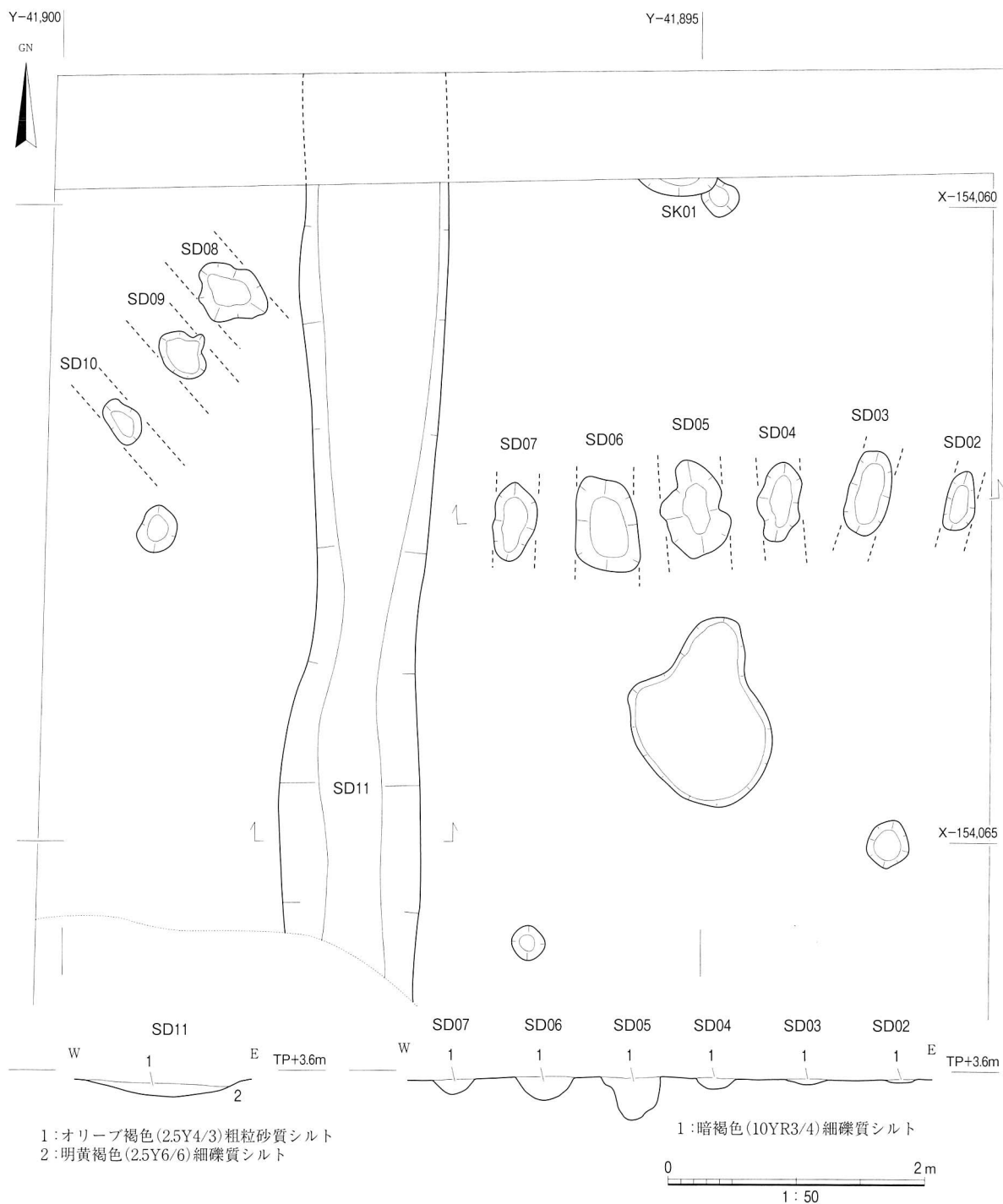


図26 SD11・鋤溝群平面・断面図

土器類・瓦の細片が出土したが、図化しうるものはない。

SD58 6A区に位置する幅0.4～1.5m、深さ0.1mの不整形な溝状の遺構で、鋤溝群SD38～50を切るが、遺構の北端は南北溝SD11に切られている(図27)。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)細礫質シルト～灰色(5Y4/1)粗粒砂で、弥生時代終末の土器片のほか、石鏃や須恵器片が出土した(図28)。

75は体部の外縁部に方形の高台を貼り付けた須恵器杯Bの細片である。器体の内外面をヨコナデ調整している。8世紀中頃に属するものであろう。

76は最大長2.6cm、最大幅1.7cm、最大厚0.25cm、重さ1.0gのサヌカイト製の凹基無茎式石鏃である。



図27 SK35・SD58・鋤溝群平面・断面図

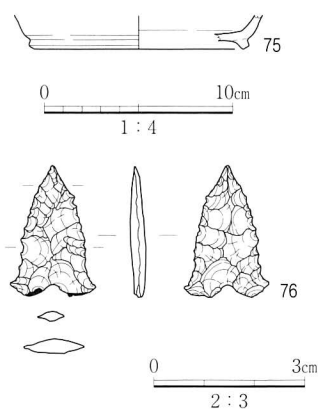


図28 SD58出土遺物実測図

表裏面とも外縁から内に向かって細部調整しており、尖端は鋭い。基部を左右に張るように調整していることや形態からみて、縄文時代前期に属する可能性がある(図28)。これらの遺物はSD58の年代を直接示す遺物ではないが、喜連西遺跡の年代や性格を明らかにするうえで基礎的な資料といえよう。

踏込み群 6A～7A区に位置する径0.2～0.4m、深さ0.05cm前後ある。第4層中から踏み込まれており、埋土は暗褐色(10YR3/4)細礫質シルトである。弥生土器の細片が出土した以外、時期を示すものは見られなかった。踏込み群は偶蹄類の足跡群と考える。

第 4 節 江戸時代の遺構と遺物

江戸時代の遺構は 1・2 区の第 2 層の上面で検出した当地域の条里制の方位と一致する畦畔のほか、第 2 層の下面で確認された鋤溝群がある。ここでは畦畔 SR101～105 について報告しておく。

SR101 1 区の西部を南北に延びる上幅約 0.6～0.8m、高さ 0.1m の断面形が台形を呈する畦畔である (図 29)。畦畔の位置 (Y=-41.1900) やこれからわずかに東に寄った位置の下層に既述した江戸時代以前の坪境溝とみた SD11・77 があるが、これも本畦畔が当地区の基幹となる畦畔であったことを示唆している。

SR102 2C 区に位置する幅 0.3～0.7m、高さ 0.1m の断面形が台形を呈する畦畔である。本畦畔と東にある SR101 の距離は、畦畔の頂部間で 10.1m ある。

SR103 2E 区に位置する上幅 0.7～0.9m、高さ 0.1m の断面形が台形を呈する畦畔である (図 29)。畦畔の東法面には東に延びる突起状の畦畔があるが、これは東に約 22.8m 離れた位置にある SR102 から西側に延びる畦畔に取りつく可能性がある (図 29)。

SR104 2B～2C 区に位置する SR102 から東に延びる上幅約 0.5m、高さ約 0.1m の断面形が台形を呈する畦畔で、これから東に約 9 m の位置に南北方向の SR101 がある (図 29)。

SR105 2B～2C 区に位置する SR102 から東に延びる



図 29 第 2 層上面遺構配置図

上幅・高さとも北側にあるSR104と変わらない畦畔である(図29)。SR104・105間の距離は上幅で約4 mあり、一見小区画水田の畦畔のようであるが、これらの畦畔の周囲には旧市営住宅の基礎があり、全容は掴めなかった。

以上の畦畔は既述したように下層にある坪境溝とみるSD11・77と同様に当地域の条里制地割を踏襲する遺構の1つといえよう。

第5節 各層出土の遺物

ここでは各層から出土した遺物のうち、図化したものを上位層から順を追って報告する(図30・31)。

77は肥前磁器染付油壺である。口縁部は張りのある体部から筒状の細い頸部を経て大きく開く。器体の外面の圈線など染付の呉須の質は悪く、内面は露胎である。78は肥前磁器染付碗で、器表面には圈線間に柳の文様がある。79は肥前磁器染付碗で、器体内底面に蛇目釉剥ぎが、器体外面には草花文と高台近くに3条の圈線がある。以上の肥前磁器は77・78が18世紀後葉～19世紀前葉、79は18世紀中～後葉に属するものであろう。

80は煙管の吸口で、片方を狭めた一枚の薄い銅板(厚さ0.05mm)を丸めて製作している。18世紀～19世紀代に属するものとみられる。

81は平瓦の細片で、凹面には糸切り痕が、凸面は糸切りのあと、粗いナデで整えている。中世瓦であろう。

82は須恵器蓋の扁平なつまみで、器体の表裏面をヨコナデ調整している。83は頸部から口縁部が大きく開いたあと、端部を上方に肥厚した須恵器広口壺である。器体の内外面をヨコナデ調整している。84は頸部から水平に開く口縁部を垂下させた弥生土器広口壺である。口縁部の外端面には3条の凹線文を施している。器面の残りが悪いが、調整はヨコナデのようである。以上の土器の所属時期は82・83が8世紀頃、84は弥生時代中期後葉に属するものである。

85は直径2.35cm、厚さ約1mmの紹聖元寶で、北宋の紹聖年間(1094～1097)に鑄造されたものである。文字は行書体で、渡来銭の一種である。

86・87は第2層、88・89は第5層から出土した石器である。これらの石材は砂岩である89以外はすべてサヌカイトである。86は最大長5.90cm、最大幅3.70cm、最大厚1.50cm、重さ39.0gの石核で、剥離面の外側に自然面が残る。87は最大長3.25cm、最大幅2.40cm、最大厚0.6cm、重さ3.9gで楔形石器の可能性がある。88は最大長4.90cm、最大幅1.85cm、最大厚0.55cm、重さ3.9gの凸基有茎式石鏃である。

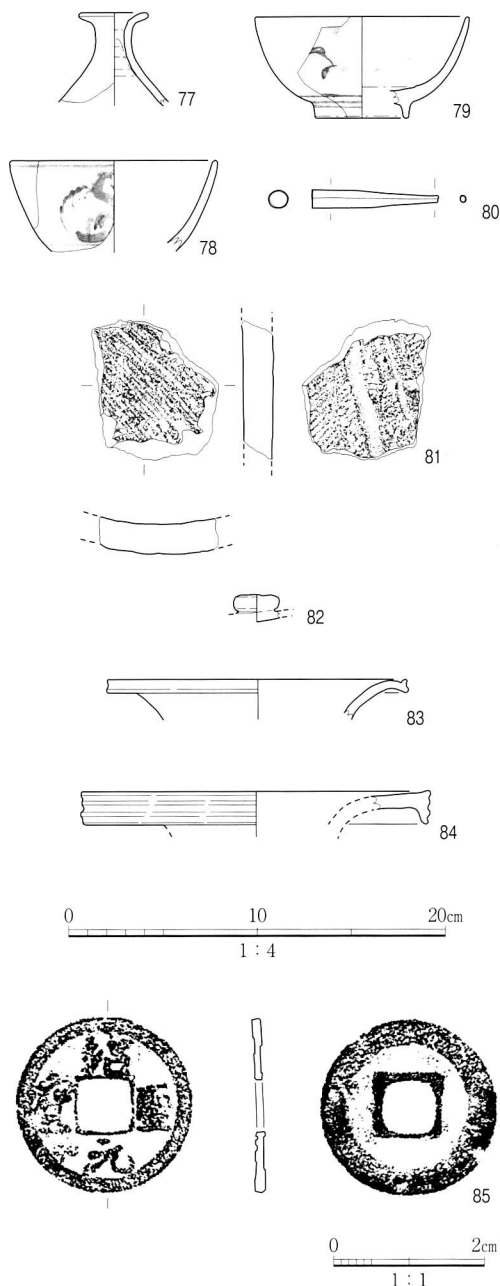


図30 各層出土遺物実測図(1)
第2層(77～83・85)、第5層(84)

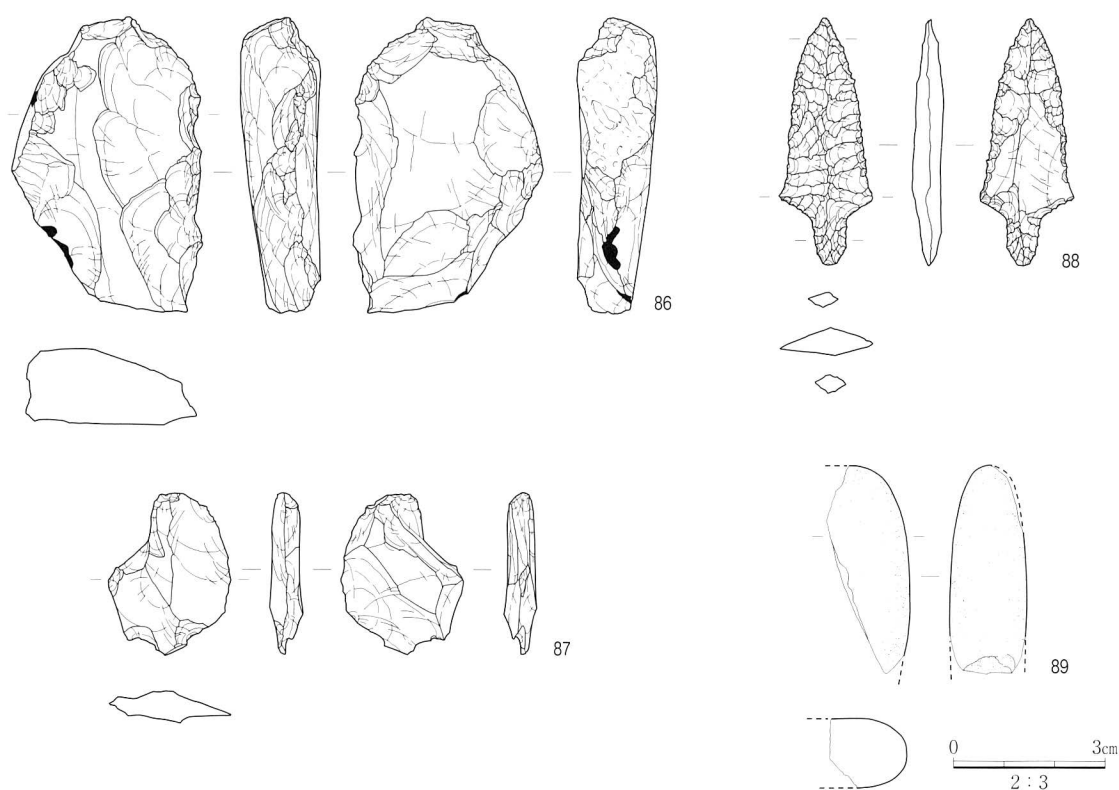


図31 各層出土遺物実測図(2)
第2層(86・87)、第5層(88・89)

る。片面に剥片の主要剥離面が残っているが、基部を含めて外縁部から内に向かって細部調整を施している。先端・基部・茎部とも断面形態は菱形を呈するものである。89は敲石の残欠である。以上の石器のうち、形態や調整技法から弥生時代中期後葉に属する石鏃とみる88以外は器面が著しく風化していることから、弥生時代以前の石器と考えられる。中でも石核86は後期旧石器時代に属する可能性がある。

第Ⅲ章 調査のまとめ

今回の調査では後期旧石器時代の石器、縄文時代前期の石鏃、弥生時代中期後葉の石鏃および敲石、弥生時代中期後葉の土器、弥生時代終末の土器、平安時代～江戸時代の土器類、金属器や銭貨など多岐に渡る遺物のほか、弥生時代終末(庄内1～2期)の土器が投棄された土壙SK66および全長22mの墳丘墓SX75など、喜連西遺跡を特徴付ける遺構・遺物を検出することができた。これらの資料は喜連西遺跡のみならず、南に位置する後期旧石器時代～江戸時代に至る複合遺跡として知られる瓜破北遺跡を含めて河内台地の北縁部に分布する遺跡の実態を明らかにするうえで重要な資料となった。ここでは調査成果を時代順に列記して調査のまとめとしたい。

後期旧石器時代

1区の弥生時代終末の遺構内および第6層の上部から後期旧石器時代のサヌカイト製の楔形石器・小型ナイフ形石器・石核・剥片などが出土した。これらは喜連西遺跡も南に位置する瓜破北遺跡と同様に後期旧石器時代のキャンプサイトが存在することを裏付けている。今後調査地周辺で行われる発掘調査の際には、旧石器調査を実施する必要があるだろう。

縄文時代前期

当該期とみられる凹基無茎式石鏃が1点出土したのみであるが、これは調査地域が後期旧石器時代以降も人々の生業の場になっていたことを示唆する資料として注意すべきものである。

弥生時代中期後葉

弥生時代中期後葉に属する多数の土器および凸基有茎式石鏃が1点出土した。これらは遊離資料ではあるが、喜連西遺跡にも弥生時代中期後葉の集落が営まれていたことを示唆するものであり、今後調査地域で集落に関係する具体的な遺構が検出される可能性がこれまで以上に高くなったといえる。

弥生時代終末

本調査では保存状態は悪かったが、弥生時代終末期の土器群(庄内1～2期)を伴うSK66、土器埋納壙SP37、墳丘墓SX75・76を検出した。このうち、SX75は墳丘の一辺が12～13mの方形の墳丘墓で、本墳丘墓の周溝を含めた規模は、全長約22mあり、隣接する墳丘の一辺が約4mの墳丘墓(いわゆる方形周溝墓)SX76と比べると格段に大きなことがわかる。両墳丘墓の築造時期は周溝の埋土の状況や出土土器からみてさほど変わらないことから、墳丘の規模の違いは埋葬された被葬者の社会的な地位の格差を示すものと考えられる。弥生時代終末の喜連西遺跡の墓域の範囲や墓葬の具体的な状況については今回の調査資料のみではわからないが、2基の墳丘墓の位置を考慮すると、墓域はこれから北西および南東にかけて広がっている可能性がある。なお、当地域でこれまでに確認されている弥生時代終末(庄内1～2期)の墳丘墓は、本調査地の東方に位置する喜連東遺跡(KR86-4次：SX401・402)[大阪市文化財協会2009c]および、南に隣接する瓜破北遺跡(UR04-2次：SX501)[大阪市文化

財協会2006]で確認されているが、これまでのところSX75が同一時期の墳丘墓の中では最大である。

一方、喜連西遺跡の2基の墳丘墓を含む墓域と南に隣接する瓜破北遺跡(UR04-2次調査地)で確認されている墓域間の距離は直線距離で約500m離れており、2地点間の標高差は約0.7mある。つまり、弥生時代終末の旧地表面は瓜破北遺跡から喜連西遺跡に向かってわずかに下がっていることを示しており、この間には弥生時代後期後葉～終末の居住域が存在するものとみられている[大阪市文化財協会2006]。今後、本調査地の周辺部の調査が進めば両遺跡間の具体的な状況についても明らかになるであろう。

室町時代

室町時代の遺構としては掘立柱建物および耕作に伴う鋤溝群をはじめ、当地域の条里制方位と同じ溝を検出した。第4層の下面で検出した鋤溝群の方位は北西方向であり、当地域の条里制の方位とは大きく異なるものであった。しかし、鋤溝群が示す方位は短期間のうちに条里制の方位と同じ方位の溝に変わっていた。このような鋤溝群や坪境の可能性のある溝の方位が変わる背景には有力な寺社による荘園の開発とその衰退、在地富豪層の台頭など当地域の支配体制の変遷と軌を一にしている。

江戸時代

本調査で検出した基幹となる畦畔群は、当地域が前の時代に引き続き条里制の方位を継承した田園地帯であったことを物語っており、その景観は調査地一帯が住宅地に変貌した近年まで大きくは変わらなかったようである。

表4 遺構観察表

調査次数	遺構名	地区	層位	規模(m)				主要埋土	時期
				長辺(長径)	短辺(短径)	直径	深さ		
KR10-1	SR101	1区	第2層上面	—	上幅0.6～0.8	—	高さ0.1	—	江戸時代
KR10-1	SR102	2C	第2層上面	—	上幅0.3～0.7	—	高さ0.1	—	江戸時代
KR10-1	SR103	2E	第2層上面	—	上幅0.7～0.9	—	高さ0.1	—	江戸時代
KR10-1	SR104	2B～2C	第2層上面	—	上幅0.5	—	高さ0.1	—	江戸時代
KR10-1	SR105	2B～2C	第2層上面	—	上幅0.5	—	高さ0.1	—	江戸時代
KR10-1	SK01	7A	第4層下面	0.8	0.3以上	—	0.3	第6層の偽磔を含む灰色磔混り粘土質シルト	室町時代
KR10-1	SD02	7A	第4層下面	—	幅0.2	—	0.1	暗褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD03	7A	第4層下面	—	幅0.3	—	0.1	暗褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD04	7A	第4層下面	—	幅0.3	—	0.1	暗褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD05	7A	第4層下面	—	幅0.5	—	0.3	暗褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD06	7A	第4層下面	—	幅0.5	—	0.2	暗褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD07	7A	第4層下面	—	幅0.3	—	0.1	暗褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD08	7A	第4層下面	—	幅0.5	—	0.1	暗褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD09	7A	第4層下面	—	幅0.4	—	0.03	暗褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD10	7A	第4層下面	—	幅0.2	—	0.05	暗褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD11	6～8A	第4層下面	—	幅0.4～1.3	—	0.1	オリブ褐色粗粒砂質シルト	室町時代
KR10-1	踏込み群	7A	第4層下面	約0.4	約0.3	—	約0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SK35	6A	第4層下面	0.4	0.3	—	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD36	6・7A	第4層下面	—	幅0.2～0.4	—	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SP37	6A	第4層下面	0.23	0.2	—	0.35	黒褐色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SD38	6A	第4層下面	—	幅0.4	—	0.08	明黄褐色シルト	室町時代
KR10-1	SD39	6A	第4層下面	—	幅0.5	—	0.07	にぶい黄褐色細磔質シルト～明黄褐色シルト	室町時代
KR10-1	SD40	6A	第4層下面	—	幅0.5	—	0.10	にぶい黄褐色細磔質シルトと灰色粗粒砂の偽磔	室町時代
KR10-1	SD41	6A	第4層下面	—	幅0.5	—	0.05	にぶい黄褐色細磔質シルトと灰色粗粒砂の偽磔	室町時代
KR10-1	SD42	6A	第4層下面	—	幅0.6	—	0.08	にぶい黄褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD43	6A	第4層下面	—	幅0.4	—	0.10	にぶい黄褐色細磔質シルト～明黄褐色シルト	室町時代
KR10-1	SD44	6A	第4層下面	—	幅0.5	—	0.08	にぶい黄褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD45	6A	第4層下面	—	幅0.3	—	0.05	にぶい黄褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD46	6A	第4層下面	—	幅0.4	—	0.06	にぶい黄褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD47	6A	第4層下面	—	幅0.3	—	0.06	灰色粗粒砂	室町時代
KR10-1	SD48	6A	第4層下面	—	幅0.3	—	0.08	にぶい黄褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD49	6A	第4層下面	—	幅0.2	—	—	—	室町時代
KR10-1	SD50	5A	第4層下面	—	幅0.3	—	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	室町時代
KR10-1	SD51	5A	第6層上面	—	幅0.5	—	0.1	黒褐色シルト	弥生時代
KR10-1	SP52	5A	第6層上面	—	—	0.2	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SK53	5A	第6層上面	0.55	0.45	—	0.05	にぶい黄褐色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SK54	5A	第6層上面	—	—	0.5	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SK55	5A	第6層上面	—	—	0.6	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SP56	5A	第6層上面	—	—	0.3	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SP57	5A	第6層上面	—	—	0.3	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SD58	6A	第5層上面	—	0.4～1.5	—	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト～灰色粗粒砂	室町時代
KR10-1	SX59	5A	第6層上面	3.8以上	2.0以上	—	0.2	黒褐色細粒砂質シルト	弥生時代
KR10-1	SD60	5A	第6層上面	—	幅0.4～1.1	—	0.1～0.2	黒褐色シルト	弥生時代
KR10-1	SB61	3A	第5層上面	東西2.8～3.0	南北2.8	柱穴0.25～0.4	0.2～0.35	掘形浅黄色細磔質シルト 柱痕跡:灰オリブ～黄色粘土質シルト	室町時代
KR10-1	SP62	3A	第5層上面	0.3	0.2	—	0.1	黒褐色シルト	室町時代
KR10-1	SP63	3A	第5層上面	0.3	0.2	—	0.2	掘形暗オリブ色シルト 柱痕跡:黒褐色シルト	室町時代
KR10-1	SP64	3A	第5層上面	0.3	0.3	—	0.2	掘形暗オリブ色シルト 柱痕跡:黒褐色シルト	室町時代
KR10-1	SP65	2A	第5層上面	0.4	0.4	—	0.2	掘形暗オリブ色シルト 柱痕跡:黒褐色シルト	室町時代
KR10-1	SK66	6A	第6層上面	1.7以上	1.5	—	0.5	下層:暗オリブ褐色粘土質シルト 上層:暗褐色細粒砂質シルト～黒褐色粘土質シルト	弥生時代
KR10-1	SK67	5A	第6層上面	0.5	0.5	—	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SP68	5A	第6層上面	0.3	0.2	—	0.1	にぶい黄褐色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SK69	5A	第6層上面	1.15	0.8	—	0.2	オリブ黒色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SA70	2・3A	第5層上面	約10.5	—	0.3～0.4	0.2	黒褐色シルト	室町時代
KR10-1	SK71	5A	第6層上面	1.4	0.7	—	0.6	黒褐色シルト	弥生時代
KR10-1	SX72	5A	第6層上面	3.0以上	約3.0	—	0.3	オリブ黒色シルト～暗オリブ褐色シルト質極細粒砂	弥生時代
KR10-1	SK73	5A	第6層上面	1.1	0.76	—	0.3	黒色～灰オリブ色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SK74	5A	第6層上面	0.7以上	0.9	—	0.4	オリブ黄色細磔質シルト	弥生時代
KR10-1	SX75	2AB・3AB・4A	第6層上面	全長約22.0	墳丘幅約120～130	周溝幅2.5～4.5	約0.3～0.5	黒色粘土質シルト	弥生時代
KR10-1	SX76	4AB	第6層上面	全長約4.5	?	周溝幅0.4～0.7	約0.2	オリブ褐色粘土質シルト	弥生時代
KR10-1	SD77	2～6A	第4層下面	—	幅0.5～1.2	—	0.1	オリブ褐色粗粒砂質シルト	室町時代

表5 遺物観察表(1)

掲載 番号	器種	器形	地区	遺構名	層名	口径(cm)	器高(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼 成	備考
1	弥生土 器	細頸壺	6A拡張 区	SK66	—	(9.1)	(6.0)	—	橙色～暗灰黄色	長石・石英・ チャート	良 好	口縁部1/4 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
2	弥生土 器	細頸壺	6A拡張 区	SK66	—	—	(4.1)	—	にぶい黄橙色～ 明褐色	長石・石英・雲 母・チャート	良 好	口縁～頸部1/2 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
3	弥生土 器	広口壺	6A拡張 区	SK66	—	(17.8)	(6.0)	—	浅黄色～にぶい 黄褐色	石英・長石・ チャート	や や 良	口縁部1/6 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
4	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	—	(10.0)	—	灰白色～灰色	長石・石英・ チャート	や や 良	頸～肩部1/6 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
5	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	最大長(3.3)	最大幅(3.7)	—	にぶい黄褐色・ 橙色～黄灰色	長石・石英	良 好	小片 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
6	弥生土 器	広口壺	6A拡張 区	SK66	—	(19.0)	(1.45)	—	にぶい黄褐色～ オリブ黒色	石英・長石	や や 良	口縁部1/12 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
7	弥生土 器	広口壺	6A拡張 区	SK66	—	(21.0)	(1.4)	—	暗灰黄色	長石・石英・雲 母・角閃石	や や 良	口縁部1/12 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
8	弥生土 器	広口壺	6A拡張 区	SK66	—	(16.4)	(3.1)	—	黄褐色	長石・石英・雲 母・角閃石	良 好	口縁部1/3 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
9	弥生土 器	広口壺	6A拡張 区	SK66	—	(22.4)	(3.6)	—	にぶい黄褐色	長石・石英・角閃 石	良 好	口縁部1/8 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
10	弥生土 器	広口壺	6A拡張 区	SK66	—	(25.2)	(7.3)	—	にぶい黄褐色	石英・長石・雲 母・角閃石	良 好	口縁部約1/2 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
11	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(19.4)	(5.8)	—	浅黄色	長石・石英・黒色 粒	良 好	口縁～頸部1/8 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
12	弥生土 器	小型甕	6A拡張 区	SK66	—	(11.2)	(2.0)	—	浅黄褐色～にぶ い橙色	長石・石英	良 好	口縁部1/6 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
13	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	底径5.2	(5.2)	—	にぶい黄色～黒 色	長石・石英・角閃 石	良 好	底部のみ 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
14	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	底径4.8	(4.1)	—	暗灰黄色～黄褐 色	石英・長石・雲 母・角閃石	や や 良	底部のみ 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
15	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	底径(9.2)	(5.1)	—	明赤褐色～灰黄 褐色	長石・石英・ チャート	や や 良	底部1/2 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
16	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	底径5.6	(2.4)	—	にぶい橙色・浅 黄褐色～淡橙色	長石・石英・ チャート	良 好	底部3/4 弥生時代中期 後葉(河内Ⅳ-3 様式)
17	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(11.4)	(10.8)	—	にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色	長石・石英	や や 良	口縁～体部1/3 庄内1～2期
18	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(14.8)	(5.2)	—	浅黄色～橙色	長石・石英・ チャート	や や 良	口縁～頸部1/6 庄内1～2期
19	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(14.9)	(5.6)	—	橙色・にぶい黄 褐色～灰黄色・ にぶい黄色	長石・石英・ チャート	良 好	口縁～肩部1/6 庄内1～2期
20	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(15.3)	(6.6)	—	にぶい褐色～に ぶい黄褐色	長石・石英	良 好	口縁部1/6 庄内1～2期
21	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(17.7)	(7.3)	—	にぶい黄褐色～ 橙色	長石・石英・ チャート	や や 良	口縁～肩部1/6 庄内1～2期
22	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	底径4.0	(4.7)	—	橙色～灰色	長石・石英・ チャート	や や 良	底部1/2 庄内1～2期
23	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	底径4.5	(4.1)	—	にぶい黄褐色～ 暗灰黄色	長石・石英・雲 母・角閃石	良 好	底部のみ 庄内 1～2期
24	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	底径3.2	(2.3)	—	にぶい黄色～浅 黄色	長石・石英・ チャート	良 好	底部のみ 庄内1～2期
25	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	底径4.0	(2.0)	—	黄褐色・黄灰色 ～灰色	長石・石英・ チャート	良 好	底部1/2 庄内1～2期

表6 遺物観察表(2)

掲載 番号	器種	器形	地区	遺構名	層名	口径(cm)	器高(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼 成	備考
26	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	底径4.5	(2.2)	—	灰黄色～橙色	長石・石英・ チャート	やや 良	底部のみ 庄内 1～2期
27	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(14.8)	(2.9)	—	浅黄色～灰白色	長石・石英・ チャート	やや 良	口縁部1/6 庄内1～2期
28	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(12.8)	(6.6)	—	灰黄褐色～黄灰 色	長石・石英・ チャート	良 好	口縁～肩部1/6 庄内1～2期
29	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(15.2)	(5.5)	—	橙色～淡黄色	長石・石英・ チャート	やや 良	口縁～頸部1/3 庄内1～2期
30	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(14.8)	(3.7)	—	暗灰黄色・黒色 ～灰黄褐色	長石・石英・角閃 石	やや 良	口縁部1/4 庄内1～2期
31	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(12.8)	(5.2)	—	にぶい黄褐色・ にぶい赤褐色～ 赤褐色	長石・石英・ チャート	やや 良	口縁部1/4 庄内1～2期
32	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(16.2)	(3.2)	—	にぶい黄褐色	長石・石英・ チャート・雲母	良 好	口縁部1/6 庄内1～2期
33	弥生土 器	甕	6A拡張 区	SK66	—	(17.6)	(4.7)	—	浅黄橙色・暗灰 色～にぶい黄橙 色	長石・石英	やや 良	口縁～頸部1/8 庄内1～2期
34	弥生土 器	広口壺	6A拡張 区	SK66	—	(20.0)	(2.5)	—	浅黄色～浅黄橙 色	長石・石英	良 好	口縁部1/10 庄内1～2期
35	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	底径3.0	(1.9)	—	灰黄色～にぶい 黄褐色	長石・石英・ チャート	良 好	底部のみ 庄内 1～2期
36	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	底径4.2	(3.0)	—	橙色・黒褐色～ 黄灰色	長石・石英	良 好	底部のみ 庄内 1～2期
37	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	底径4.0	(3.8)	—	浅黄橙色	長石・石英・ チャート・赤色粒	良 好	底部のみ 庄内 1～2期
38	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	—	(11.7)	—	浅黄橙色	長石・石英・ チャート	良 好	体～底部1/2 播磨西部産の 広口壺? 庄内 1～2期
39	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	底径3.0	(3.8)	—	灰黄褐色～浅黄 橙色	長石・石英・ チャート	良 好	底部のみ 庄内 1～2期
40	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	底径2.1	(3.5)	—	浅黄橙色	長石・石英・ チャート	良 好	底部1/2 庄内1～2期
41	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	—	(4.7)	—	淡黄色	長石・石英・ チャート・雲母	やや 良	底部のみ 庄内 1～2期
42	弥生土 器	壺	6A拡張 区	SK66	—	—	(6.1)	—	灰白色～灰色	長石・石英・ チャート	良 好	体部1/3 庄内 1～2期
43	弥生土 器	鉢	6A拡張 区	SK66	—	(12.5)	(8.5)	—	浅黄色～橙色	長石・石英・雲母	良 好	頸～体部1/2 庄内1～2期 播磨産?
44	弥生土 器	有段高杯	6A拡張 区	SK66	—	—	(3.0)	—	浅黄橙色	長石・石英・ チャート	やや 良	杯底部1/4 庄内1～2期
45	弥生土 器	有段高杯	6A拡張 区	SK66	—	—	(3.15)	—	浅黄色～橙色・ にぶい黄色	長石・石英・ チャート	良 好	杯底部1/3 庄内1～2期
46	弥生土 器	高杯	6A拡張 区	SK66	—	—	(2.2)	—	灰白色～浅黄色	長石・石英・ チャート	良 好	杯底部1/6 庄内1～2期
47	弥生土 器	高杯	6A拡張 区	SK66	—	底径(15.6)	(3.1)	—	橙色～浅黄色	長石・石英・ チャート	良 好	脚部1/8 庄内 1～2期
48	石器	敲石	6A拡張 区	SK66	—	最大長7.4	最大幅4.95	124.0	—	—	—	砂岩(表面もろ い)
49	石器	敲石	6A拡張 区	SK66	—	最大長5.35	最大幅3.55	64.1	—	—	—	礫岩
50	石器	楔形	1区5A	SX59周辺	—	最大長5.2	最大幅2.85	21.6	—	—	—	サヌカイト 後期旧石器時 代か
51	石器	剥片	1区5A	SX59周辺	—	最大長2.7	最大幅1.95	1.8	—	—	—	サヌカイト 後期旧石器時 代か
52	石器	剥片	1区6A	SX59周辺	—	最大長2.4	最大幅2.1	1.9	—	—	—	サヌカイト 後期旧石器時 代か
53	石器	剥片	1区5A	SX59周辺	—	最大長2.45	最大幅2.6	2.1	—	—	—	サヌカイト 後期旧石器時 代か
54	石器	剥片	1区5A	SX59周辺	—	最大長3.45	最大幅3.2	6.9	—	—	—	サヌカイト 後期旧石器時 代か
55	土製品	丸玉	1区5A	SX72	—	直径1.45	—	—	にぶい黄色	長石・石英	良 好	完形 紐孔見られな い
56	弥生土 器	甕	1区5A	SK73	—	底径6.0	(3.5)	—	明黄褐色～灰色	長石・石英	良 好	底部1/3 弥生時代中期 後葉
57	弥生土 器	鉢	1区6A	SP37	—	12.8	6.4	—	にぶい黄橙色	長石・石英・赤色 粒・角閃石	良 好	完形 庄内2 期
58	弥生土 器	複合口縁 壺	1区2A	SX75南周 溝	—	(26.1)	(10.1)	—	明赤褐色～にぶ い褐色・黒色	長石・石英・雲 母・角閃石	良 好	口縁～頸部1/6 生駒西麓産 庄内2期

表7 遺物観察表(3)

掲載 番号	器種	器形	地区	遺構名	層名	口径(cm)	器高(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼 成	備考
59	弥生土 器	甕	1区2A	SX75南周 溝	—	—	(5.2)	—	浅黄色～黄灰色	長石・石英・ チャート	や や 良	底部のみ 庄内 2期
60	石器	楔形	1区2A	SX75南周 溝	—	最大長4.8	最大幅3.05	15.6	—	—	—	サヌカイト
61	石器	剥片	1区2A	SX75南周 溝	—	最大長4.05	最大幅3.2	21.0	—	—	—	サヌカイト
62	石器	剥片	1区2A	SX75南周 溝	—	最大長2.8	最大幅3.95	4.7	—	—	—	サヌカイト
63	石器	剥片	1区2B	SX75西周 溝	—	最大長4.3	最大幅3.2	14.9	—	—	—	サヌカイト
64	石器	敲石	1区2B	SX75西周 溝	—	残存長(4.6)	最大幅4.7	60.9	—	—	—	砂岩
65	弥生土 器	広口壺	1区4A	SX75北周 溝	—	(23.7)	(1.5)	—	にぶい褐色	長石・石英・角閃 石	や や 良	口縁部1/8 生 駒西麓産 弥生 中期後葉
66	弥生土 器	直口壺	1区4A	SX75北周 溝	—	(7.0)	(4.6)	—	灰黄色	長石・雲母・角閃 石	良 好	吉備産?
67	弥生土 器	甕	1区4A	SX75北周 溝	—	(14.2)	(2.5)	—	灰黄色・黄灰色 ～灰黄褐色	長石・石英・ チャート・角閃 石・雲母	や や 良	小片 生駒西麓 産 庄内2期
68	弥生土 器	蛸壺	1区4A	SX75北周 溝	—	(7.0)	(3.4)	—	淡黄色	密	良 好	小片 庄内2期
69	弥生土 器	甕	1区4A	SX75北周 溝	—	底径(4.4)	(3.25)	—	浅黄色・黄灰色 ～暗灰黄色	長石・チャート・ 角閃石	や や 良	底部のみ 庄内 2期
70	弥生土 器	甕	1区4A	SX75北周 溝	—	底径(8.4)	(3.55)	—	灰白色	石英	良 好	小片 弥生中期 後葉
71	石器	ナイフ形 石器	1区4A	SX75北周 溝	—	最大長2.65	最大幅1.05	0.7	—	—	—	サヌカイト
72	石器	剥片	1区4A	SX75北周 溝	—	最大長2.6	最大幅1.7	2.7	—	—	—	サヌカイト
73	石器	楔形	1区4A	SX75北周 溝	—	最大長6.35	最大幅5.25	51.0	—	—	—	サヌカイト
74	石器	敲石	1区4A	SX75北周 溝	—	最大長7.2	残存幅(6.1)	179.4	—	—	—	砂岩
75	須恵器	杯B	1区6A	SD58	—	底径(11.0)	(1.8)	—	灰白色	石英・長石	良 好	底部1/12 平安時代初期
76	石器	石鏃	1区6A	SD58	—	最大長2.6	最大幅1.7	1.0	—	—	—	サヌカイト 凹基無茎式 縄文時代前期
77	肥前磁 器	染付油壺	1区3A	—	第2層	(3.4)	(4.9)	—	明緑灰色	黒色粒	良 好	小片 18c後葉 ～19c前葉
78	肥前磁 器	染付碗	1区4～ 5A	—	第2層	(10.8)	(4.8)	—	明青灰色	黒色粒	良 好	小片 18c後葉 ～19c前葉
79	肥前磁 器	染付碗	1区4A	—	第2層	(11.2)	5.4	—	灰白色	密	良 好	1/5 18c中葉～後葉
80	銅製品	煙管(吸 口)	1区4A	—	第2層	最大長6.7	最大幅0.95	—	—	—	—	18c～19c代
81	瓦	平瓦	1区5A	—	第2層	最大長(7.3)	最大幅(6.3)	—	灰色	長石・石英	良 好	小片 中世瓦
82	須恵器	杯蓋	1区7A	—	第2層	—	(1.5)	—	灰白色	長石・雲母・酸化 鉄粒	良 好	つまみ部のみ 8c代
83	須恵器	広口壺	1区7A	—	第2層	15.8	(2.1)	—	青灰色	長石・雲母・酸化 鉄粒	良 好	小片 8c代
84	弥生土 器	広口壺	1区4A	—	第5層	18.4	(2.4)	—	にぶい黄橙色	長石・石英・ チャート	良 好	小片 弥生時代中期 後葉
85	銭	紹聖元寶	1区6A	—	第2層	直径2.35	最大厚0.1	—	—	—	—	紹聖年間(1094 ～1097)
86	石器	石核	1区北	—	第2層	最大長5.9	最大幅3.7	39.0	—	—	—	サヌカイト 後期旧石器時代
87	石器	楔形	1区5A	—	第2層	最大長3.25	最大幅2.4	3.9	—	—	—	サヌカイト 弥生時代以前
88	石器	石鏃	1区5A	—	第5層	最大長4.9	最大幅1.85	3.9	—	—	—	サヌカイト 凸基有茎式 弥生時代中期 後葉
89	石器	敲石	1区5A	—	第5層	残存長(4.15)	残存幅(1.55)	11.2	—	—	—	砂岩 弥生時代 以前

引 用・参 考 文 献

- 足利健亮1985、「地形発達と地質」:松原市史編纂委員会編『松原市史』第一巻、pp.17-36
- 大阪市史編纂所1988、『新修大阪市史』第1巻
- 大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』
- 1980、『瓜破北遺跡』
- 1981、『瓜破北遺跡』Ⅱ
- 1983、『瓜破遺跡発掘調査報告』
- 1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ
- 1999、『長原遺跡発掘調査報告』ⅩⅤ
- 2000、『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』
- 2002a『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 2002b『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ
- 2003、『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 2006、『瓜破北遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 2009a、『瓜破北遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 2009b、『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ
- 2009c、「KR86-2・86-4次調査」:『大阪市南部遺跡群発掘調査報告』、pp.77-82
- 2011、『長原遺跡発掘調査報告』ⅩⅩ
- 大阪文化財センター1976、『大阪府高速大阪松原線建設に伴う瓜破遺跡試掘調査報告書』
- 2007、『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書』Ⅶ
- 大庭重信2000、「瓜破・瓜破北遺跡の歴史的変遷」:大阪市文化財協会編『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.157-162
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器碗」:中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.315-327
- 絹川一徳2000、「石器器種とその分類」:大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ、pp.150-179
- 建設省国土地理院1965、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』
- 小山正忠・竹原秀雄2006、『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社
- 佐藤隆2008、「平安時代前期の長原」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告ⅩⅥ』、pp.92-96
- 白川俊義2010、「『伎人郷』喜連村小史」:『『伎人(くれひと)』の歴史・暮らし・まちの誇り』平野区役所、pp.11-14
- 田中清美2011a、「第Ⅲ章調査結果の検討」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』ⅩⅨ、pp.74-78
- 2011b、「第2節出土土器の編年的位置づけ」:大阪市博物館協会大阪文化財研究所編『平野馬場遺跡発掘調査報告』、pp.75-78
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店
- 趙哲済1983、「瓜破・瓜破北遺跡の層序」:大阪市文化財協会編『瓜破遺跡』、pp.17-20
- 寺沢薫・森井貞夫1989、「河内地域」:『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社、pp.41-146
- 古市晃・杉本厚典1997、「照ヶ丘矢田遺跡でみつかった弥生時代的大型壺」:大阪市文化財協会編『葦火』71号、pp.8
- 古谷正和・田井昭子1993、「大阪層群と段丘堆積層・沖積層の花粉化石」:市原 実編『大阪層群』 創元社、pp.247-255

- 文化庁文化財部記念物課編2010、「第1節 遺跡における土層の認識」：『発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-』、pp.94-115
- 松本百合子1999、「矢田2丁目所在遺跡の調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1997年度—』、pp.49-52
- 光谷拓実2001、「年輪年代法と文化財」：『日本の美術』6
- 光谷拓実・大河内隆之2006、『歴史学の編年研究における年輪年代法の応用—中期計画(2001～2005年)事業調査報告書—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター古環境研究室
- 森岡秀人・西村歩2006、「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題—最新年代学を基礎として—」：『古式土師器の年代学』pp.507-588
- 森田克行1990、「7 摂津地域」：『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ、pp.167-191

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- え 円形浮文…………… 11, 20
- お 凹基無茎式石鏃…………… 29, 37
凹線文…………… 11, 34
- き 煙管…………… 34
- く 楔形石器…………… 20, 23, 34, 37
- け 畦畔…………… 2, 7, 32, 33, 38
圈線…………… 34
- こ 呉須…………… 34
- さ 細頸壺…………… 11
柵列…………… 25
- し 刺突文…………… 11
蛇目釉剥ぎ…………… 34
紹聖元寶…………… 34
条里制…………… 2, 25, 32, 33, 38
- す 鋤溝…………… 7, 25, 29, 30, 32, 38
- せ 石鏃…………… 42, 53, 65
- そ 草花文…………… 34
- た 高杯…………… 15
蛸壺…………… 23
敲石…………… 15, 22, 23, 35, 37
竪穴建物…………… 1
- ち 竹管文…………… 20, 22
直口壺…………… 22, 23
直線文…………… 11, 22
- つ 杯B…………… 29
坪境…………… 25, 32, 33, 38
- と 土器棺墓…………… 1
土器埋納墳…………… 19, 37
土製丸玉…………… 17
凸基有茎式石鏃…………… 34, 37
渡来銭…………… 34
- な ナイフ形石器…………… 23, 37
- は 波状文…………… 11
鉢…………… 11, 15, 19
- ひ 肥前磁器染付油壺…………… 34
肥前磁器染付碗…………… 34
廟堂…………… 1
平瓦…………… 34
広口壺…………… 11, 14, 15, 22, 34
- ふ 複合口縁壺…………… 20, 23
布留式土器…………… 15
墳丘墓…………… 1, 20, 23, 37, 38
- へ 平行タタキ…………… 11, 14
- ほ 方形周溝墓…………… 1, 23, 37
掘立柱建物…………… 1, 25, 38
- れ 列点文…………… 11
簾状文…………… 11
- ろ 露胎…………… 34

〈地名・遺跡名など〉

- あ 阿波…………… 15
- い 生駒西麓…………… 20, 22, 23
- う 瓜破北遺跡…………… 1, 2, 4, 7, 10, 37, 38
- き 吉備…………… 23
喜連西遺跡…………… 1, 2, 3, 4, 7, 10, 31, 37, 38
喜連東遺跡…………… 1, 2, 37
- さ 讃岐…………… 15
- し 磯鹵津路…………… 1, 2, 4
- な 長原遺跡…………… 10
- は 播磨…………… 14, 15
- ひ 平野馬場遺跡…………… 14
- ほ 北宋…………… 34
- や 矢田2丁目所在遺跡…………… 1

**The Excavation Report
of the
Kire-Nishi Site
in Osaka, Japan**

A Report of Excavation
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB: Building

SA: Fence

SD: Ditch

SK: Pit

SP: Posthole

SX: Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Acknowledgement

Chapter I Background and progress of research.....	1
1 Geographical setting of site and former research results	
2 Progress of research and report making	

Chapter II Results of research	7
1 Stratigraphy	
2 Features and artifacts of the Yayoi Period	
3 Features and artifacts of the Muromachi Period	
4 Features and artifacts of the Edo Periods	
5 Finds from each stratum	

Chapter III Conclusion	37
------------------------------	----

References and Bibliography	43
-----------------------------------	----

Postscript and Index

Reference Card

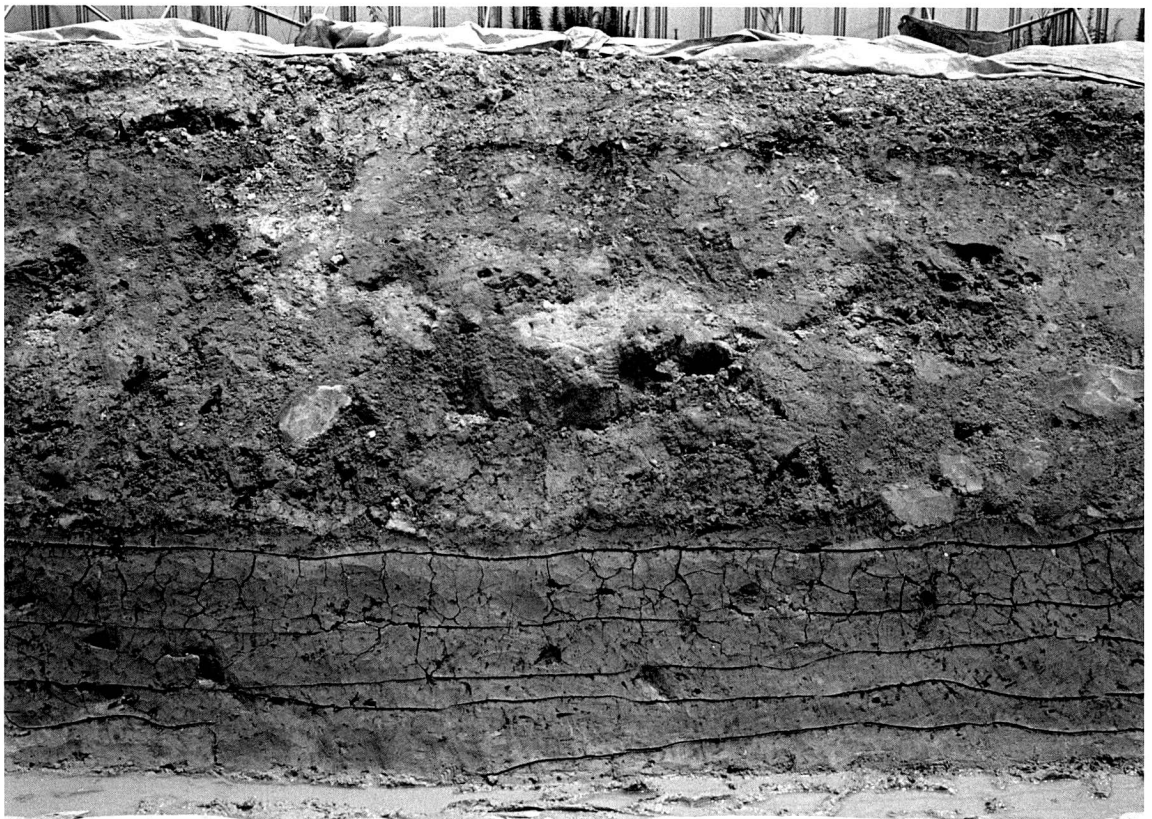
報告書抄録

ふりがな	きれにしいせきはくつちょうさほうこく							
書名	喜連西遺跡発掘調査報告							
編著者名	田中清美							
編集機関	財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2012年3月9日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きれにし 喜連西遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 きれにし 喜連西4丁目	27126	-	34° 36′ 37″	135° 32′ 34″	20100614 ～ 20100928	1,063㎡	大阪市営西喜連 住宅建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
喜連西遺跡	その他	後期旧石器時代				楔形石器・小型ナイフ形石器・剥片		
	その他	縄文時代前期				凹基無茎式石鏃		
	その他	弥生時代中期後葉				弥生土器・凸基有茎式石鏃		
	集落・墳墓	弥生時代終末期		土壌・土器埋納壙・墳丘墓		弥生土器・敲石		
	耕作地	室町～江戸時代		掘立柱建物・水田・鋤溝群・溝		土師器・須恵器・瓦器・銭貨・肥前磁器・瓦		
要約	<p>本書は、喜連西遺跡において2010年度に行った1件の発掘調査の成果を報告するものである。</p> <p>後期旧石器時代の可能性の高いサヌカイト製の楔形石器・小型ナイフ形石器・石核・剥片、縄文時代前期に属する石鏃などが出土した。</p> <p>弥生時代では中期後葉の土器や石鏃、同終末の大型の墳丘墓や土壌、土器埋納壙ほかを検出し、南方にある同時期の瓜破北遺跡の集落および墓域と当地域の関係を明らかにするための資料を得た。</p> <p>室町時代の掘立柱建物や鋤溝群、当地域の条里制方位と同じ溝は、中世集落や当時の景観を復元する上で基礎となる資料である。また、紹聖元寶は輸入銭貨として注目しうる。</p> <p>江戸時代後期以降の畦畔は、中世以降も当地域が引き続き田園地帯であったことを裏付ける資料であり、肥前染付磁器や煙管の吸口などは当時の農村での生活の一端を今に伝えるものである。</p>							

図 版



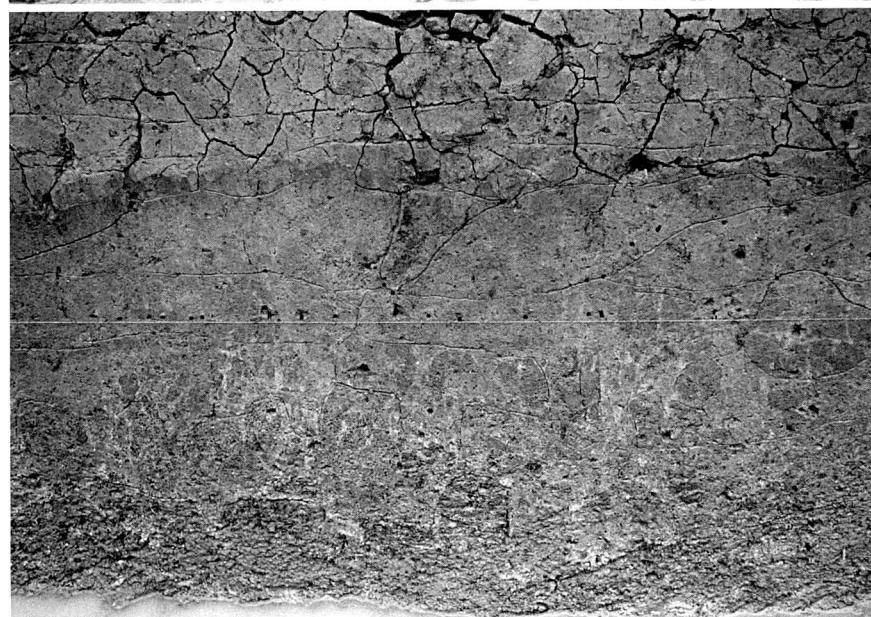
1区 東壁地層断面5～6区(西から)



1区 東壁地層断面6～7区(西から)



1区 東壁地層断面
4A区南部
(西から)



1区 東壁地層断面
4A区中央部
(西から)



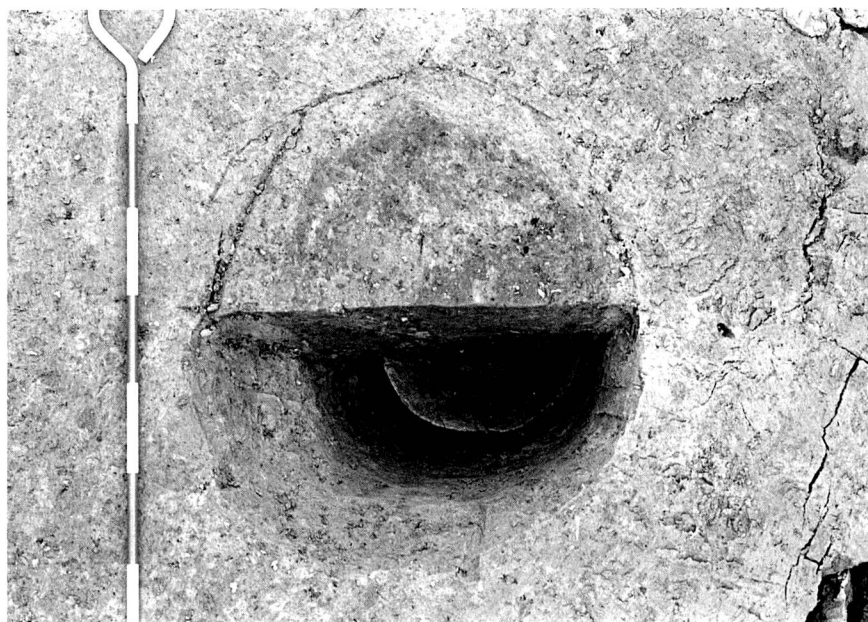
1区 東壁地層断面
4A区以北
(南西から)



SK66検出状況（北から）



SK66南北セクション東壁地層断面（西から）



SP37検出状況
(南から)



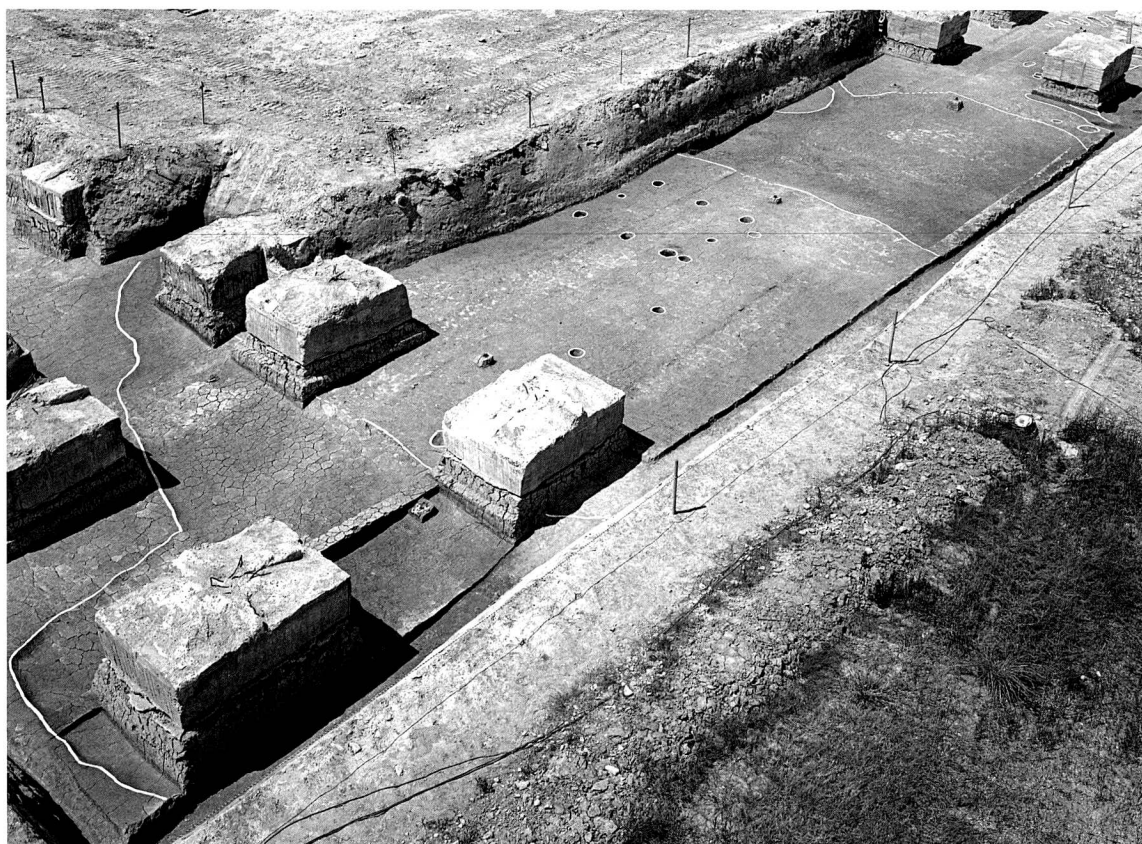
SP37土器埋納状況
(南から)



SP37断面(南から)



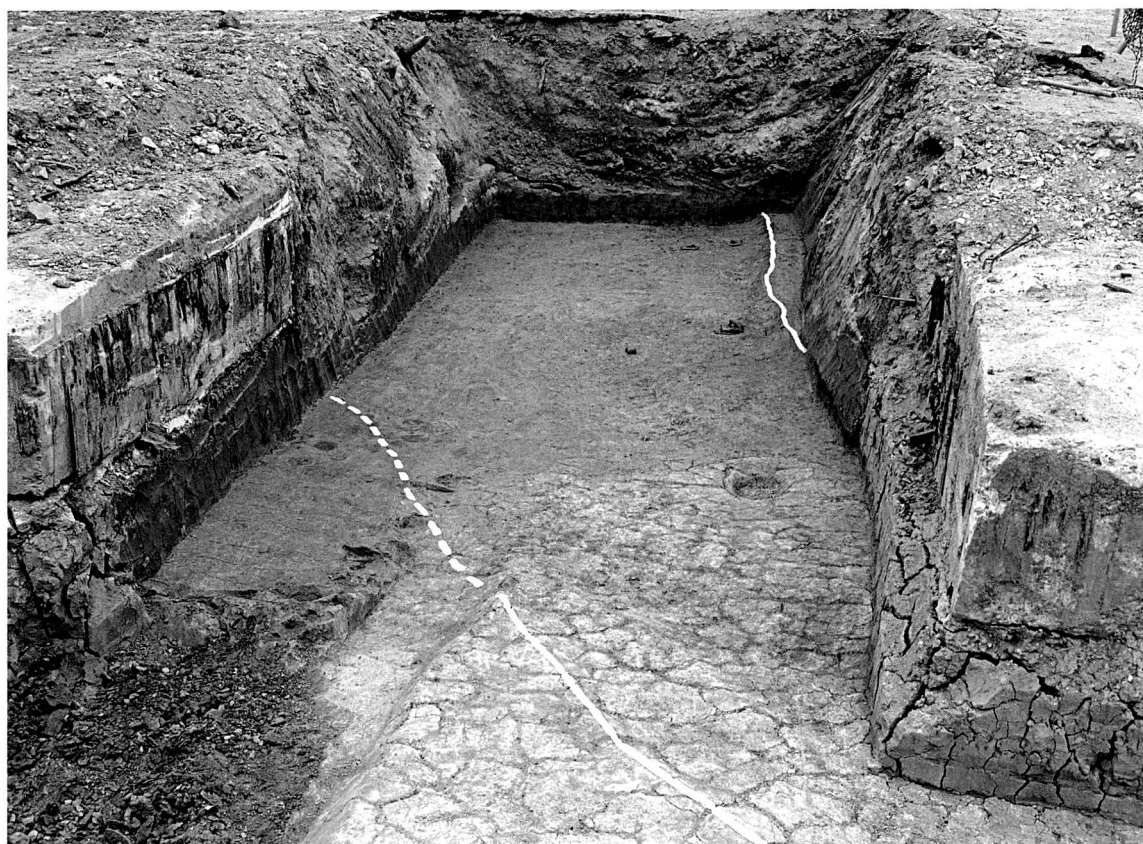
SX75全景(南東から)



SX75全景(南東から)



SX75南周溝東部遺物出土状況(南東から)



SX75拡張区西周溝全景(南から)

1区 第5層上面遺構
検出状況
(北から)



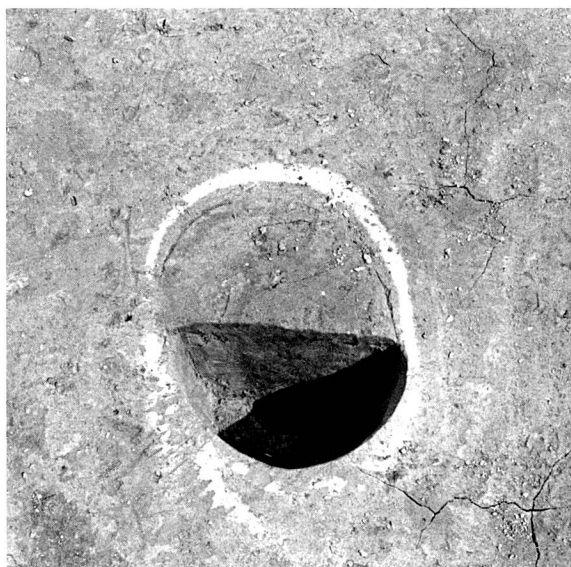
1区 第5層上面遺構検出状況(北から)



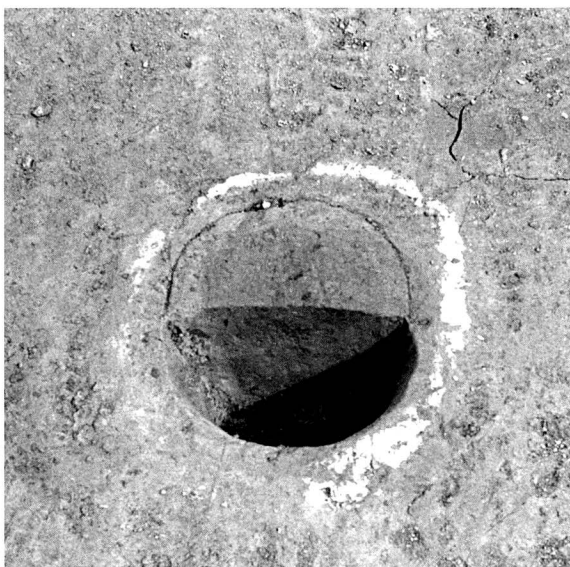
鋤溝群全景(北東から)



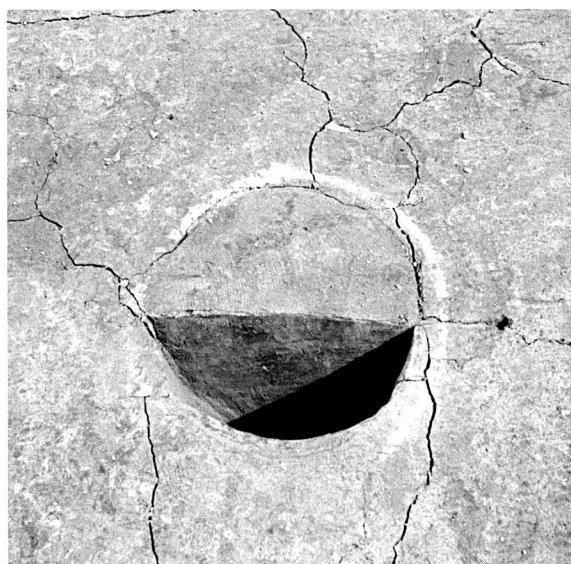
鋤溝群全景(北東から)



SB61-1 (南から)



SB61-4 (南から)



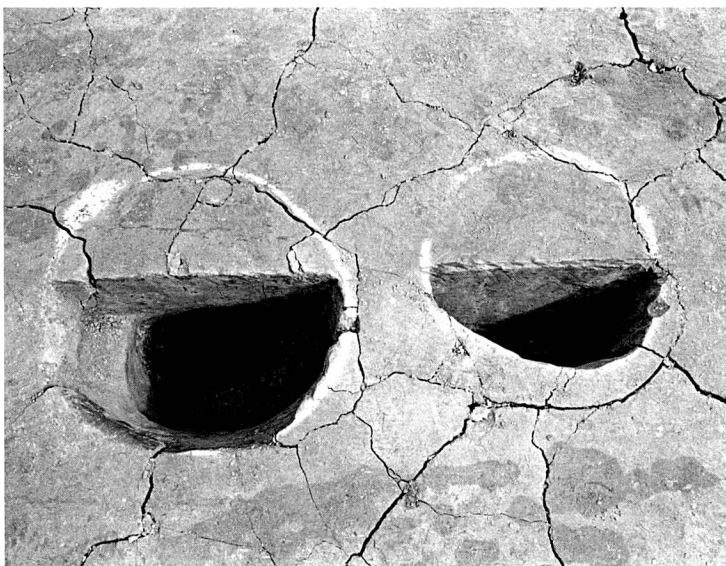
SB61-2 (南から)



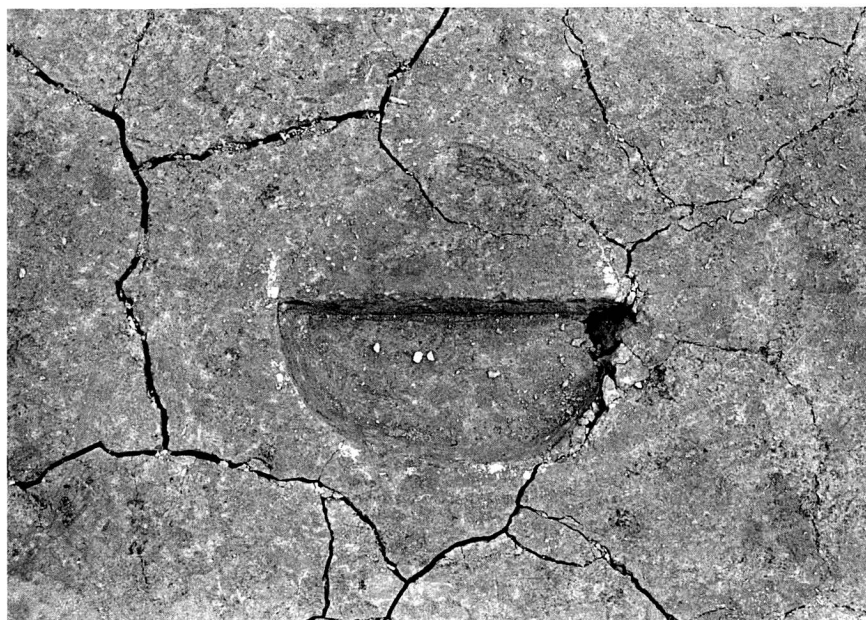
SB61-6 (南から)



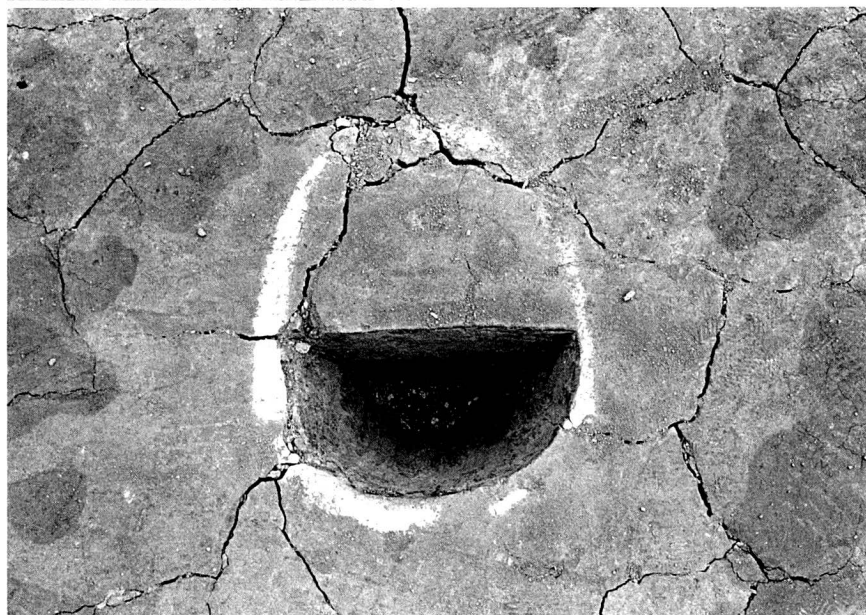
SB61-3 (南から)



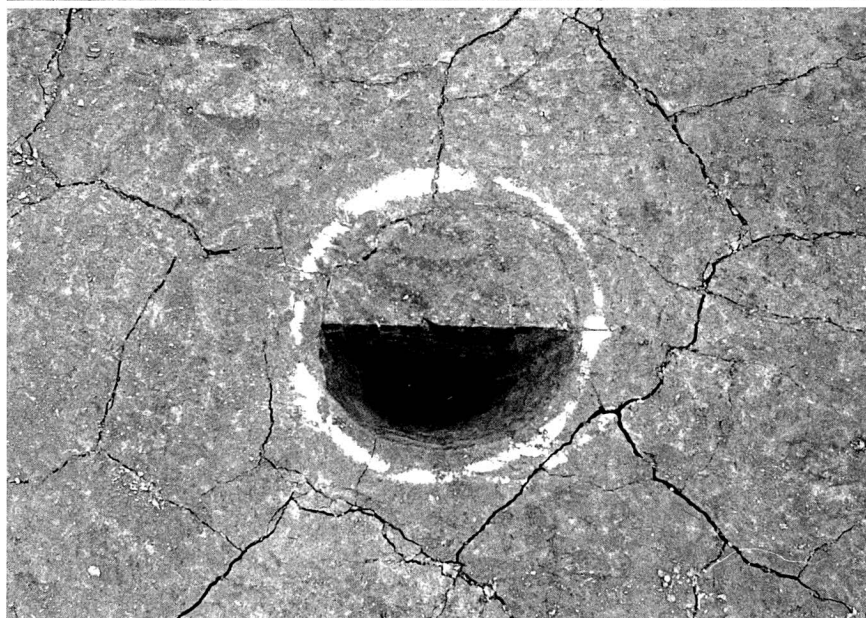
左：SB61-8 右：SB61-9 (南から)



SP62検出状況(南から)

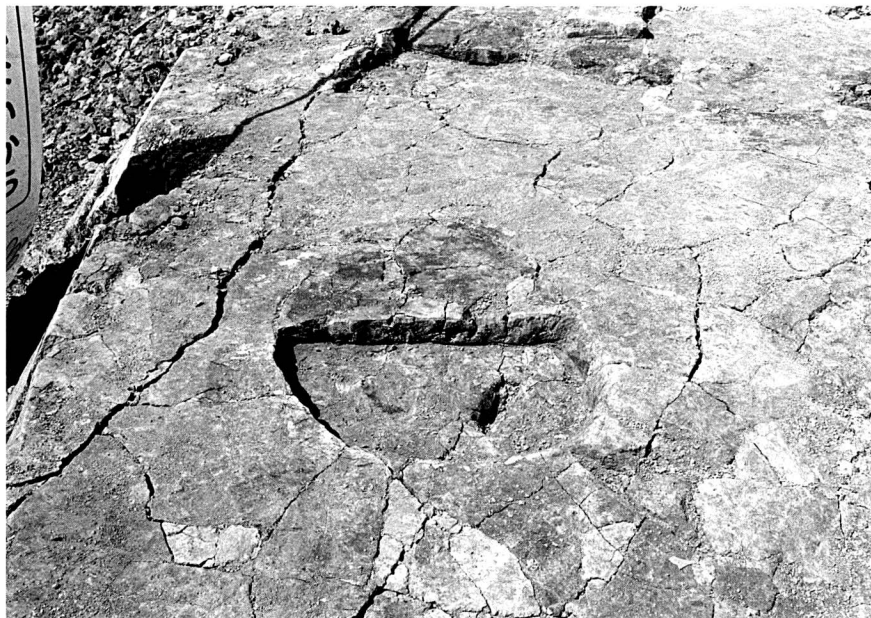


SP63(南から)



SP64(南から)

SK35断面(南から)



SD03・04断面
(北から)

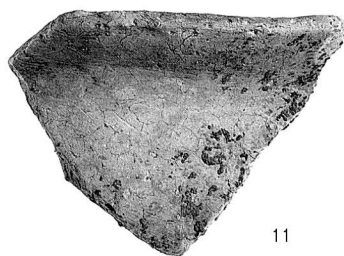


SD05断面(北から)





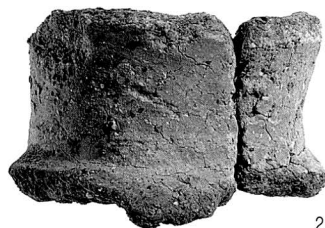
1



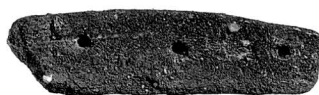
11



3



2



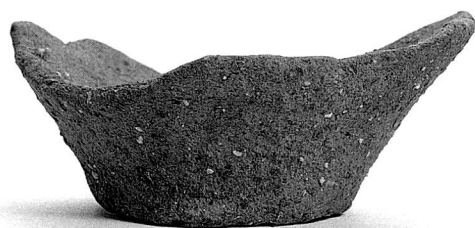
6



9



7



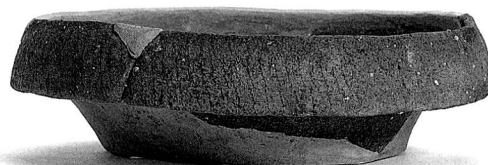
14



8



15



10



29



43



22



38



36



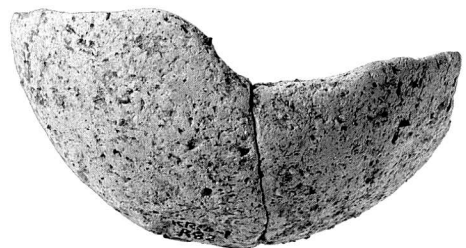
37



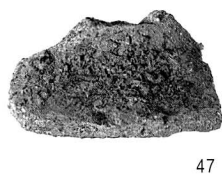
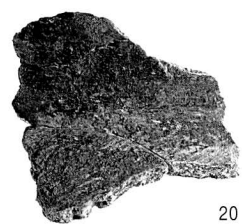
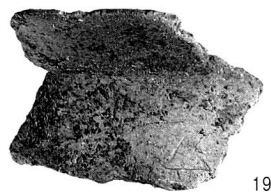
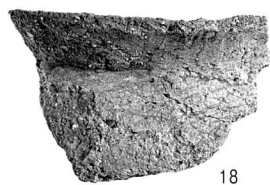
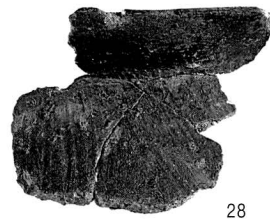
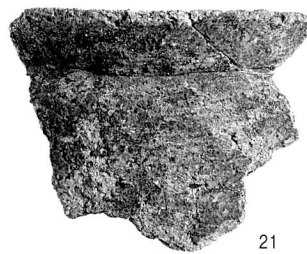
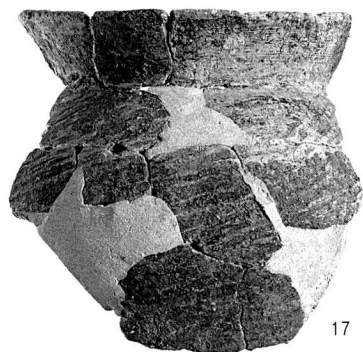
39

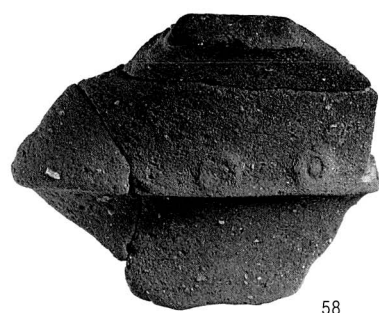


41



40

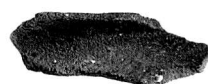




58



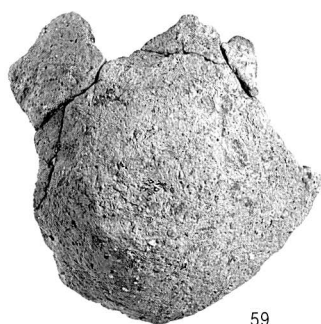
65



67



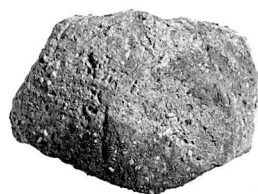
68



59



69



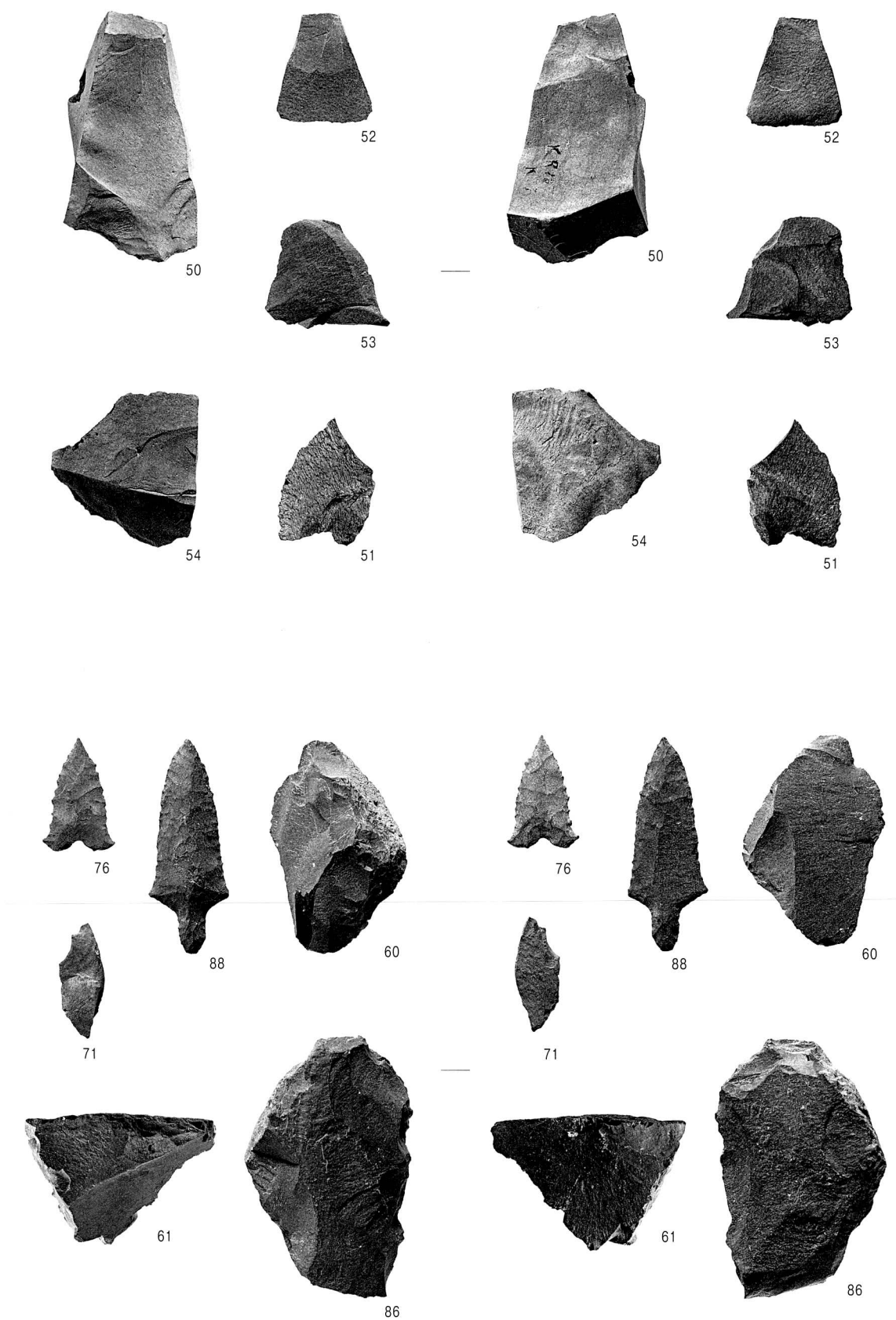
70



66



SX75南周溝(62)、西周溝(63・64)、北周溝(72~74)、SK66(48・49)



SX59周辺(50~54)、SD58(76)、SX75南周溝(60・61)、北周溝(71)、第2層(86)、第5層(88)



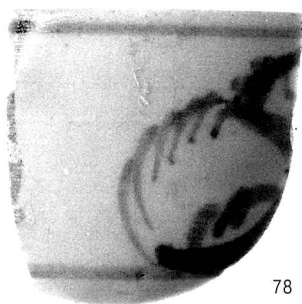
57



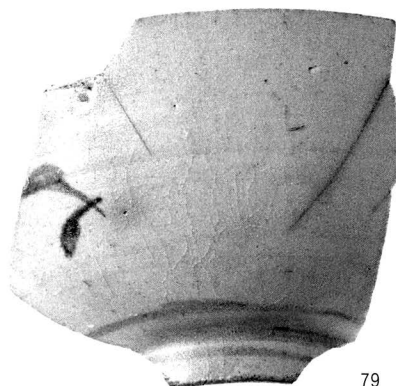
80



85



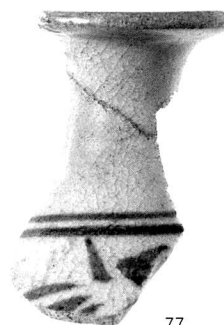
78



79



81



77

大阪市平野区 喜連西遺跡発掘調査報告

ISBN 978-4-86305-061-7

2012年3月9日 発行©

編集・発行 財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町2-5-31

**The Excavation Report
of the
Kire-Nishi Site
in Osaka, Japan**

A Report of Excavation
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

**The Excavation Report
of the
Kire-Nishi Site
in Osaka, Japan**

A Report of Excavation
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association